

古史傳

自第五十二段
至第五十五段

十一

和
歷
第三号

和	四	一	一	一	一
書	二	三	二	一	一
門	五	一	一	一	一
類	八	一	一	一	一
號	一	一	一	一	一
函	一	一	一	一	一
架	一	一	一	一	一
冊	一	一	一	一	一

內	四	一	一	一
閣	二	三	二	一
文	五	一	一	一
庫	八	一	一	一
類	一	一	一	一
號	一	一	一	一
冊	一	一	一	一
函	一	一	一	一
架	一	一	一	一

內閣文庫	番號	和 42518
	冊數	40 (14)
	函號	140 185



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



古史記十一卷

卷之七

平定川

男 漢 趙 主 孫 趙 主 孫

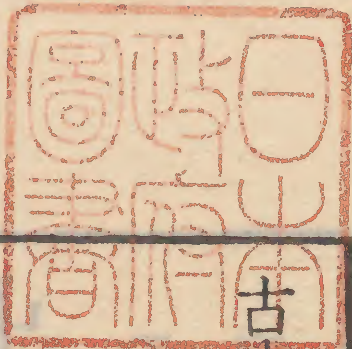
漢 趙 主 孫

三十一

如此種種設備而召天兒屋根

命亦名天天布刀玉命而令卜

擬生捕天香山出真男處而全



古史傳十一出卷

神代中三出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

二十五

如此種種設備而召天兒屋根

命。亦名天。天布刀玉命而令ト

擬。生捕天香山出眞男鹿而全



又キニソノカタヲ又キテハナチヤリトリアメノカグヤマノ
拔其肩拔而放出。取天香山出。

天波波迦。燒其肩骨而ト合則。

御宇良合謀矣。此者鹿出御ト

出起也。

天兒屋根命。天太王命。此御名の意を。下ふ云。云々。○召を
高皇產靈神の御前ふあす。○令ト擬。本書よ。令ト合麻迦
那波とあるを。字鏡

ふ擬設也。度也。万加奈不。令トを。兒屋根命。ふ係す。令擬を
と有よ依て。正字を書於。太王命。ふ係れす。古を。此時設備とる。謀事の大御神の御
心ヲ應ひて。出御べきや否やを。兒屋根命。ふト相し。免。此
事ども此。御心ヲ應ふ。非の出ゑらむ。太王命。取持て。
擬ひ獻奉れと令し給。命あす。師云。字書よ。擬揣度。以待也。
世の俗よ。万事をふ。さ祓て。執行をも。まよ用脚。○眞男鹿
を給をも。ほり。ぬ多と云。を。意のう。於まる。あり。眞男鹿
は。牡鹿あす。前よ。を。眞名鹿。眞は稱辭。ふ。顯宗天皇紀了。
牡鹿此云。左鳴子加と有。めて。師の言れとる。如く。佐袁鹿
て。ふ名を。常ふ。多く云。免れど。眞男鹿と云。依を。他よ。は。見
當らび。佐も。眞も。稱辭よ。云。和名抄。ふ。鹿。和名加。私記云。牡

鹿、佐乎之加。牝鹿、和名米加と見也。お不同書、まひ字鏡お

此よ要おんちて鹿を本語を。決て迦具おめりむを。加

とも志加とも言習へるおらむと所思と也。其由を。下百第

十三段天、迦久、神の処。ふ云、はし。肩、和名抄ふ。肩加太、髑髏加太乃

保禰と、の肩を抜とむ。其骨を拔取を云おめ。さて加多

を、躰の傍に在て、片端ある故ふ云あるべし。又此を焼て

出とる非をカタと云ひ、ち依しと為べき形をもカタと

云ひ、記臆ふある云、図をもカタを云ふ。こお肩をり、轉れ

る言あるべし。又語るのカタも象をり出て、同言おらむ。

○天波、ハカ迦カ也。古事記よ、婆く迦と作るを、師説ふ、和名抄

ふ。朱櫻波く迦。一云、迹波、まよ木具部ふ、樺木皮名、可以為

炬者也。和名加波。又云、加今櫻皮有之と見え、万葉六ふ櫻

源氏物語おど

皮、ハキツク流舟ととみ。古今集、物名ふ。迦、源氏物語おど

迦婆櫻也。此等を合せて思ふよ。此木の本名を。波く迦

ふて。後、世平仮字の書どもふを、多く波和迦、迦婆は皮名

お也。加、婆を、加、爾、婆のさて皮を専ら用ふ、依、うら、迦、爾、婆

櫻と、木の名よ、お、為、れる、お、め、か、ま、む、和、名、抄、ふ、迹、波、佐

脱とるこそ著し、古今集、加ふ、驚、ざ、くら、の、注、ふ、朱、櫻、と、加

るりと、顯、昭、が、云、る、と、く、符、へ、り、○今云、近、頃、世、よ、出、と、る、

本草、和名よ、櫻桃一名、朱櫻、胡、頹、子、云、く、和、名、抄、ふ、加、乃、美、

一名、加、爾、波、佐、久、良、乃、美、と、何、り、此、書、を、和、名、抄、ふ、引、れ、て、

淡江、輔、仁、の、錄、せ、る、物、お、り、師、の、和、名、抄、ふ、迹、波、佐、久、良、と、

あるを、加、字、脱と、依、お、ら、む、と、云、れ、お、る、考、を、く、符、へ、り、

さて、此、ふ、此、木、を、取、は、皮、を、燃、し、て、彼、鹿、の、肩、骨、を、灼、む、料、

那也。漢籍五雜俎と云もの、樺皮、を、有、也、お、ち、信、友、が、説

燒、之、易、燃、而、無、烟、也、と、云、へ、也、

ふ。おの波く迎と云木を。まぢ龜ト書どもふ記し何るを。
 集めて記さば常此櫻ふあらで。花形四ありて。常の櫻を
花形五抄
何犬櫻と云物あり。夫木集俊頼卿
の哥ふ。山蔭ふ瘦さヤセ存布子
 依犬櫻追放とまて引人も外し。と詠れしハ。此名此歌ふ
 見えたる初。う。ま。と加婆櫻と云名を詠るを。新撰六帖笠衣
 右大臣ふ。比津川の岸ふふ布子依うば櫻。ちるおそ花の
 の哥。とぢ終ありぬま。と何。此を今世も或る如く。此皮を以
 や。春花の終とを。或説ふ。犬櫻はナテム此櫻とも云ふ。仙臺
う祢とるあり。の府内此駅ふ。桑折と云地の寺ふ。ナテムの櫻を。南殿櫻
ナテムの櫻と云あり。犬櫻あり。あり。松岡埴鈴云。おをカバ櫻と云も此ふて。本草ふ樺と

有もの外。此木山城の祇園林ふ多く有。と云。さて
 此木此皮をクニ薬ふ。焼ても用ひて。樺皮を云ふあるが。
今云よく食毒を下し。腫物をおほおどの功あり。其を見るふ。紙の如く薄き皮此
イ幾重も何。此頃を。其を短冊と云紙此代ふ製りて。市ふ
ロも商へり。此木を若狭あどよてを。加邇波とも。加邇波櫻
 せめ云て。波字和の如く音便り云。名義を。皮櫻あるは
 し。加邇波とを。加波てふ言を。緩く云へる調ふ。さも云ふ
 あらむ。後世よハ。加牟婆と云べき言此状あり。さて此木。木曾山ふ多く有て。
 樺と云。常ふ此を炬とタビびるふ。最イトよく燃て。大方の雨風お
 も滅キユるおと無く。皮を集めて束タバ祢とるは。殊タよく燃る

とぞ。是ふ依て思ふよ。下ふ引る式文ふ。上料、婆く加、木皮
を何れぞ。古は皮のみを集めて用ゑ依あるべし。和名抄
ふも。樺、木皮、名可以爲炬者也。とあるを思ふはきあふ。
五雜俎よ。燒之。易燃。とあるを叶牙せ。無烟と云るを己試
あるふ。油烟多きものあり。唐国を依とて。烟の有無ハ異
るべし。まご對馬人此云。波く加と云ハ。ダラ。此木とも云。
此木皮をとく乾て。火を焚くするふ。とく燃る物ありや云
ふ。まご按よ。タラや云依を。波く加の一名を非で。薪の
柴をいふ總名あるはし。但し和名抄ふ爾雅を引て。椴、小
木、叢生有刺也。和名太良とあるを。まごも一種の木ふ當
あるはふ。まご天武紀よ。荊棘野とあるを。タラ又と訓る
荊棘を。荊棘の寫誤りて。小木の義ふ取て書ま

しあり。此二字。字書よ考。されど若狭此山里人此薪柴を
る。然も用ふべきあり。川東あるを。ヘンダラと云も。干多良の意あるはく所思
ま。波あり。然まご對馬人の。波く加をダラと云も。まごとは
燒木の柴を云名あるを。一種の上ふ此み移して。專や云
あら牙依り。まご龜策傳よ。灼以荊云とあるを見て。や
はて神祇式ふ。年中御上料。波婆加、木皮者。仰大和国、有封
社。今採進之。可五枚と見ゆ。とあり。此有封社ふ仰せて
採進しむと云よと甚く心得ぐとし。さ依を有封社とは。
後紀。弘仁三年五月三日の処。ふ。制有封神社者。神戸修造。於無封社無
人修理。自今以後宜令禰宜祝等修造と見え。三代格貞觀

官符ふ。其祖神則貴而有封。其裔神則微而無封。あど有を
思ふ。神封ある社をひろく云ふとく聞えぬ。唯
有封社を採ると云ふと甚も心得ぐと死事あは加
し。此は依て考ゆ。有封字ハ寫し誤ふて穴吹まど笛吹
れどの誤りハ非ざる。されど字の躰ハ甚も此遠し。然言ゆは宮主
口傳抄御始儀の処。官掌進波く賀木。此木官掌自大和国笛
吹社請取也。まど奥儀抄も笛吹社より奉ると見ゆ。とあり。此社を神名式
ふ。大和国添上郡。笛吹神社と云あり。今印本ふて穴吹とあり。ほと一本も
穴吹とあり。今を度會延佳。舊事紀の首書引る本は
依れり。穴吹とも誤ある。とを字を其如く作れ
ども訓を何をもフエフキとある。よて著し。まど文明十
一年の古写卷大和国東大寺戒壇院神名帳。ふ。笛吹大明

神と有てフエフキ。此あるはく所思まばあり。大嘗會式
と仮字を付たり。
ふ。歌人二十人。歌女二十人。檜笛吹十二人とあるは。奈良
の笛吹を召てしれ。奈良を添上郡よほまむ。此は
社よ由あり。さて笛吹神と申は。誰れ神あらむと考ふ
ておぼゆ。
ふ。姓氏録河内内国。ふ。笛吹連。火明命之後也。と有て。次
吹田連。火明命兒。天香山命之後也。とあり。一本ふ。次田とあるを誤ある
べし。今も吹田河内。大和ふ。鄰国をまむ。笛吹氏ハ。大和
氏の人あり。
をゆ出て。河内ふも移住るふゆべし。まど次ふ吹田氏
に。其下ふ云へる。天香山命の名は。天上ふゆも。大和
れゆふも通ゆて。天香山ふ由有て。負給へる名と聞えま



多或書ふ。笛吹神を建多乎利命を祭れるありと有也。今
去の或書と和漢三。此命ハ。姓氏錄左京。竹田連の祖也。
武田折命と書て。火明命六世孫也。天孫本紀も六世
乎利命竹田連祖とあり。亦此氏の事を。第
四十六段の末も云るをも合せ考ふべし。此命此名。竹
手折といふ言ふも聞也。笛の員を數ふ依ふ。一枝二枝と
云へり。斯て笛吹氏とも同祖あるを。由有げあるを思ふ
ふ。既く天上ふして。卜事此時の火此事。與て給へる古
事此有し。傳の洩とるふや有む。天孫本紀の傳ふと依
ふ。火明命。天神御祖此詔を稟て。河内国河上此哮峯。天
降也。まると大倭国鳥見白庭山。ふうたて住み。長髓毘古の

妹を娶て。宇麻志麻治命を生給へり。天香山命は。天上
ふして生ま給子。子ふて兄ある由見えと也。今云。此と
と。櫛玉饒速日命とを。一神と為とる。天孫本紀の傳も據
て云る説も。実ふ然るよせあり。其予が考を。第四十六
段も委。此等を集めて考。依ふ。火明と申は稱も。火も由何
て聞え。河内を大和も移れ也。何るも。共も上り云
る事ども。由何れ。さて鳥見と云處を神名式も。添下郡
も。登彌神社あれ也。今云。登彌神社ハ。今木島村と云も在。
命六世孫伊香我色乎之後也。と何り。亦
不此事を。神武天皇卷も委く云ふべし。其邊の地も依べ
き。同郡も。穴吹神社あるも。由あてと云るは。凡て然る
説も。天香山命は。決て此時。波く迦。火此事。まも笛

をも。此命の吹給ひらむ。然るに此時ふ。笛吹く事も
始まらば。下見と依る如く。依るを。此命も。其
事を掌給らば。御齋の笛吹氏を負は。由る。何れに加
ふ。然るに。此命に御齋に一派の。此の時。此由縁に依て。笛吹
氏を稱す。笛吹神社を守す。此社を。決あく天香山命に
掌とゆし。故に。笛吹連の加婆禰を賜へる。あは。連を
よて。其群を主。職号の加婆禰と為。大嘗會式に。檜笛吹
ま。あ。こと。上。委。云。如。今。奈。良。笛吹を始
と。依。其。部。此。笛吹等。依。今。奈。良。笛吹を始
此。謂。因。さ。て。後。世。ま。で。も。波。く。迦。字。笛吹。社。を。進。依
こと。あ。ら。む。鳴。神。社。と

り。楯。梓。を。進。阿。波。罔。忌。部。神。社。を。り。木。綿。麻。を。進。あ。ど
と。同。例。此。故。実。あり。此。等。の。例。を。合。せ。考。へ。て。笛。吹。社。を。り。
波。く。迦。を。進。る。例。の。有。べ。○。燒。其。肩。骨。而。合。則。師。説。ふ。ト
合。二。字。殘。宇。良。閑。と。訓。は。く。其。を。ト。令。合。の。意。あ。る。あ。や。上
小。委。く。云。依。る。如。し。今。云。去。ハ。第。七。段。於。太。北。ト。け。て。上。代
此。ト。は。凡。て。か。く。鹿。の。肩。骨。を。用。ら。れ。と。也。龜。を。用。る。を。漢
の。を。學。ば。る。後。此。と。あ。也。崇。神。紀。小。命。神。龜。云。く。あ。ど。何
実。を。是。も。鹿。を。用。ひ。と。る。あ。依。る。ハ。唯。文。章。に。書。る。此。み。あ。て
と。云。ふ。書。字。引。て。龜。ト。の。神。代。を。ゆ。あ。依。る。小。紀。紀。小。龜。非。傳
と。云。く。云。へ。れ。ど。彼。書。を。古。く。り。傳。を。ま。る。鹿。此。ト。を。廢。て。龜
ト。字。普。く。世。に。用。ひ。あ。依。る。為。よ。作。れ。依。る。虚。言。ふ。て。古。書。に
非。る。こ。と。著。し。さ。て。遂。小。鹿。を。廢。ま。て。も。を。ら。龜。を。の。み。用
ら。依。る。事。小。委。ま。る。を。甚。も。哀。き。已。さ。あ。り。う。し。式。あ。ど。小
も。ト。料。小。龜。甲。此。み。見。え。て。鹿。骨。ハ。凡。て。見。え。ば。そ。の。う
み。既。く。絶。れ。依。る。あ。る。べ。し。さ。多。龜。小。あ。り。て。も。波。く。迦。を。む。

昔の如く用。万葉十四ふ。武藏野爾宇良敝可多也伎云く
可多也伎云肩灼あり。彼、国豊島郡。占方と云郷、名も和
名抄に見ゆ。○今云、此、哥、此、あとも、猶下、信友、説を、委
見、記、を、か、ま、ば、鄙、ふ、や、後、ま、で、も、鹿、ト、此、残、ま、依
見、る、べ、し、但し鹿ト此事のあはて鄙ト残れるハ非
交、東、固、ト、此、み、後、ま、で、も、鹿、ト、を、用、と、正、し、あ
と、予、別、ト、考、あり、て、下、の、常
ふやと有也。陸、ト、部、の、処、ふ、委、く、云、べ、し、そ、女、く、太、非、此、事、は、上、ふ、見
あ、る、如、く、別、天、神、と、ち、の、始、給、予、る、あ、依、字、第七段、於、太、非、
ト、相、而、の、処、合
せ考ふ。其始は何を以て。何様ふして。ト予給予也云ふ
去也。曾て知はらぬを。此、波、く、迦、火、も、て、鹿、乃、肩、骨、を、灼
て、ト、ふ、依、法、を、此、時、と、正、起、れ、正、し、あ、と、決、あ、し、け、る、を、此
時、此、招、禱、事、此、物、を、悉、く、香、山、と、り、取、ま、る、あ、と、は、下、ふ、取

總て云が如く。最も幽妙ある由縁ありて。八意思兼神の
深思遠慮ませる御心を正出さる事れるを。彼山はしも。
火之迦具土神の御骸此化れ依山して。此山は鹿の住居
るあとも。上第十六段。ふ云へる如く。獸てふ獸の多う依中ふ。
此獸も。火神の御骸も生坐る。山神の御末れも。因てあ
るあをを思ひ合せて知ら依るあ也。彼、別、天、神、と、ち、の、ト、
給、へ、る、時、を、い、ま、ど
香山を無正し以前あるを以て。彼時の太非ハ鹿トあら
び鹿トの起原を。か、れ、ら、此、時、あ、る、べ、き、事、を、思、ひ、明、也、
さ、て、上、文、ふ、高、皇、産、靈、神、の、兒、屋、根、命、を、御、前、ふ、召、了、ト、
事を仕奉るはき由を令給へるとし見されむ。トを爲る
あ、と、此、原、を、産、靈、神、の、御、心、ふ、出、と、依、あ、ま、ど、此、事、ふ、鹿、を

用ふるあとも。此時思兼神の八意を_レ出_レ出_レする事_ヲ知_レむ
有_レり依_ル。そハ童蒙抄の元文_ト思兼神_ノふ_レく_ハり_ト不_レら_レず_テそのか_ニを_レ燃_レきて_カく_テ此時_ニ鹿_ノ肩_骨を
灼_レて_トふ_レ依_事と定_マせ_レし_レう_レども_ト稱_を本_ヨり_レレ_レ儘_ニ太
兆_ト云_ヘせ_レし_レ知_レぬ。太兆_テふ_レ事_ノ由_ハ第_百九_段其_ニ下_第百_九段
ふ。天_兒屋_命者_主神_事之_宗源_者也。故_以太_兆之_卜事_俾仕_奉矣_ト何_る大_兆は_鹿の_肩骨_を灼_テト_ふる_法ある_を以_テ曉_ベし。此文_ノ事_ハ第_百九_段委_ク注_去を_見べ_シ。上古_ハ重_死御_卜は_都
幸_此ト_法ヲ_ぞ有_レり依_ル。そ_レ其_事ノ_出と_る處_ニ。さて後_ニ此_鹿ト_を龜_ト換_レと_るあ_とま_と其_トふ_レ依_状あ_ど此_事も。

信友が正_ト考_ヲ具_シ記_シ辨_多る_を今_此ヲ_要と_何る_事
を摘_ツて云_はく。兒_屋根_命の_御裔_也次_ク此_事ふ_仕奉_レれ_レて
し_哉十四_世孫_雷大_臣命_此神_功皇_后の_御世_也百_濟罔_ヘ
使_サれ_レと_るや_どふ_傳を_受て_歸り_對馬_罔ふ_住居_レし_レぐ。
其_レト_遥後_世ニ_漸ニ_弘く_テ鹿_トニ_換ら_レ依_レ程_也。
用_レら_レま_る依_れあり。今_云此_考れ_不委_クは_仲哀_天皇_卷雷_大
明_天皇_十四_年百_濟不_仰て_ト書_曆本_ヲ献_ラら_レ給_ヒし_欽
こと_書紀_ヲ見_ル也_也此_頃と_リハ_漢風_ノト_を用_レら_レれ_ルむ_也
云_レれ_し也_そも_く上_代は_人此_心大_らう_ふ正_シく_淳
直_ホあ_りれ_ル鹿_ト法_ヲ守_レて_肩骨_也加_ノ平_處を_灼て_其
其_燒目_ノ狀_ニ依_テ兆_字ト_合定_スと_りと_思ハ_依く_字漢_罔

の龜卜法也。多ま〜此方此卜法似うとふ儘也。其を
眞似びて、鹿の肩骨を龜甲に換て後、漸に漢國の龜卜術
を取添ふ。末おひよ、例の漢意に率也とる人此、漫に彼國
會易五行の道理ざと此みおありて、大凡をそまよ變也。太古此正志く大
匠うれ依卜法の趣をみれがらおかき混まて、既し世間
お廢絶とるが如くおけずおれ也と見ゆ依を多る〜
對馬國の卜部家も傳をま依卜法おめせて、少お書留
ふる物也。世に散布するを三四見あお多る。古に證し考
ゆる。然やがよ其中おたれ布古傳の鹿卜此趣もぞ遺れ
也ける。大方中、世とりの風俗として、多る〜遺れる大
古の傳おとあぜを甚く秘藏して、終に私もめく

如くして、今、世に絶たりと聞ゆる事、其を末お對馬人。
あるハ、甚も〜嘆うはしき事よこそ。此元祿九年五月に記せ
藤原齊延此記し傳とる傳書、由は奥書あり、おの齊延
の通稱を藤佐助と云也しとぞ、當時おしてを、古学此志
深う也し人と聞えて、古書ぞもの奥書も其名見え、こ
れかを論へる、ま多其口授の書どもを合せ考ず、古に符
事も見えとめ、予也と思ふ限也を、大畧記さば、卜事、我擬ふ人、まお前七
日の齋して清まは也。あま古典どもお重き神事よを、必
七日の齋おとりぬむと思ハ依、
故実よ、さる卜庭神を迎奉也。卜庭神とを、太詔戸命、櫛眞
命お坐ひあり、此當日おありて、卜庭お居て、龜甲波く迦、
事お下よ云也。木、まと卜事お用ふる。外の品くをも持て、卜庭神お祝詞
を申し。此を今云く此事を卜ふよ、正しく卜定、
させ給へと云こと告るお依也し。次、神降

此詞を讀み。古太神宮年中行事小見えとる。ちて波く

迦木枝の祢て長さ四五寸をのり。箸の太さ小作神祇にけ

るを一本ヒツ赫カクにヒツとる火に中牙さし入モヤを燃しヒクたて。其を

吹滅し。龜甲ウラに裡ウラをゆきカクたて。斯カクてそに焼ヒクひぐたヒクる

火ヒツ垢カクを視て。トふ依事ヒツふて。其火垢ヒツを非ヒツとを云ヒツふヒツ。神祇ヒツ

解ふ。非者灼龜縱横之文也と云ひ同集凡ての法は。その

火を指ヒツひ時ヒツふ此事ヒツ斯有ヒツむ非形ヒツ云ヒツくヒツあらむ。此事然らば

は。非形ヒツ云ヒツくヒツねまヒツ。と請ヒツ祈ヒツてト牙ヒツとる状ヒツにヒツ。今云トを為

請ヒツ祈ヒツぐヒツふヒツやヒツがヒツてヒツ誓ヒツの意ヒツむ牙ヒツ小異ヒツれヒツる事ヒツふヒツさヒツれ

むヒツあヒツの誓ヒツ言ヒツハトヒツのヒツ何ヒツとヒツるヒツあヒツとヒツらヒツばヒツをヒツ知ヒツ依ヒツ事ヒツの中ヒツふヒツ太

認ヒツ免ヒツて申ヒツ迄ヒツき事ヒツふヒツあヒツそ。まヒツとヒツ占ヒツ法ヒツをヒツまヒツたヒツ大ヒツ抵ヒツ大ヒツ嘗ヒツ會ヒツふ

ぞ此と死ヒツ因ヒツを占ヒツふヒツ。本ヒツとヒツりヒツ近ヒツ江ヒツ因ヒツと定ヒツ免ヒツて。非凶ヒツあヒツま

ば。まヒツあヒツ美ヒツ濃ヒツ因ヒツと定ヒツ免ヒツ。非吉ヒツあヒツまヒツむ。美濃ヒツ因ヒツを用ヒツふと云ヒツひ。

はヒツとヒツ日ヒツ記ヒツどもを考ヒツるヒツふ。災ヒツの有ヒツふヒツ扱ヒツきて。其神ヒツの御心ヒツを

ト問ヒツふ。はヒツじヒツ免ヒツ云ヒツくヒツ此事ヒツハ。誰神ヒツの崇ヒツまヒツと何方角ヒツふ坐ヒツに

神ヒツの崇ヒツよヒツて。云ヒツくヒツの事ヒツを咎ヒツ免ヒツ給ヒツふヒツ。と云ヒツ事を定ヒツ免ヒツ置

てトヒツふヒツふヒツトヒツ出ヒツさヒツる時ヒツを。まヒツと更ヒツ免ヒツてト合ヒツとる趣ヒツ小見

え。はヒツと御體ヒツトヒツは。今ヒツとヒツ何ヒツ頃ヒツまで。平穩ヒツ小御座ヒツべきヒツ。御

藥ヒツ此事ヒツハヒツは有ヒツまヒツじヒツ死ヒツふやと。是ヒツも同趣ヒツト牙ヒツとる事

と見ヒツゆ。煩いしれまバ本文をむ引出さ然ヒツれヒツむ何事ヒツふ

まヒツまヒツ。大旨ヒツ此状ヒツもヒツトヒツふヒツ事ヒツを聞ヒツえヒツ免ヒツ。漢因ヒツあヒツどのト

智もて、非を判断せしむることおぼしき神の始給へる
ト法あり、其の法に依りて、古を考へ思ふべき後世
も漢國の法に依りて、古を考へ思ふべき後世
獨ち此の上の法に依りて、古を考へ思ふべき後世
重き事、此の法に依りて、古を考へ思ふべき後世
神の御心を判断せしむることおぼしき神の始給へる
此始給へるト法に依りて、古を考へ思ふべき後世
揚の祝詞を讀了。上庭を退くを命じ。と云ゆ。おぼしき神
小見えたり。今其百ちが一の此の要とある處を
摘で記せしむ。今其百ちが一の此の要とある處を
大凡ハ大神宮年中行事に見。是より大凡ハ此の
えとる神揚哥の状あるべし。是より大凡ハ此の
伺ひ知られと云。但し其の記し出さるト法の式おぼし
此時の故事を本とて。神代を過て後此いと上代お定
給するおぼし。其在ト庭神と云ハ此時のト術を擬ひ
給へる。兒屋根命のことあるを。此神を

ト神と定とるを。決然て神代を過て後ある。さて此段の
べき理あるおぼし。準へて。のくハ云あり。さて此段の
ト合は。師説ふ。思兼神此謀て思ひ得とる種く此事此可
否を先ト問ひて後お定。行むとおぼし。凡て上代を。万
此事みお然有き。と言れと。依もける事おがら。猶おま
お思ふ。其設備とる謀事。果して天照大御神の感坐
てて。出御べきや否やと。直ハ大御神の大御心を問奉れ
るお。其由を。然まを彼骨を灼く時。決然て此謀事。
大御神の御心お應ふ。火坂云く。此非お現をきてむと。
む。御心お應ふまじくハ。火坂云く。此非お現をきてむと。
宇氣比てト牙坐けむこと。上お記せる。信友が説と合せ

考へて。曉るべし。○御宇良合謀矣。本、書、み、うらと
しを、文、よ、作、る、あ、り、う、らと、有、み、ト、宇、を、書、御宇良を御ト
多、宇、良、と、仮、宇、お、書、る、と、し、ハ、下、リ、云、ふ、御宇良を御ト
ふて。ト事を尊と依辭あらむ。うとも思牙ど。おち御心の
義主と仰て。此を大御神の御心を云ふ中。御ト比義
も籠れるお也。故、仮、宇、お、て、宇、良、と、を、書、り、ト、を、宇、良、と、云、
ふ、む、心、の、義、あ、る、お、や、也、第、七、段、お、注、せ、る、如、
くおまむ。此ある御宇良も。大御神の御心の義を有れ
ど。やがて御トの義も。其中お籠まることをとく辨べし。
其を上件れおやむ。肩骨を灼てト合と仰しうば。其設備
とる謀事どもお感て。出御べき御心の非お出とる由お
也。此術お依ておかく心裡の麻邇麻邇。非お現をま知ら
依故。太麻邇の宇良事と云ふお也。第、七、段、お、注、せ、
る、説、と、も、お、引、

合せ見てと。さて此段れト事のおとを熟思ふ。天照大
く辨ふべし。御神。うゑく岩屋戸を刺て隠し御坐せまむ。八百万神あ
ちの。かく謀おち給ふこと。露むの也も知。看さば。そ、を、
よ、宇、受、賣、命、の、排、優、の、結、を、聞、看、し、て、怪、み、ま、あ、然まむお
又御鏡を御覽して。弥奇給へるを思ふべし。然まむお
れト問を給ふと死む。其設備と依事物お感給ふ御心の
有ざ也しは元をゆふて。御心を問を給ふとしも知。看
さぬおとを。云も更お也。然るお其設備とる事物を安て
謀行ひゑらむ時。感出御べき御心の未然お非お現を
給牙ゆしは。別天神の初給牙る。太麻邇ト事れ。いぞも奇
靈ある所お也。但しかく未然お事物を知ることハ。
大、非、の、ト、事、お、み、あ、ら、び、古、を、り、有、來、

し種々の事。まゝ漢國此易ト亦ども同心き。如く
と。狐神の奇き所為との差別。此如くおあむ有る。此
事お依りてハ。かく無上至尊き大御神此御心をさす。
伺ひ察す奉らゆまむ。熟認免とらむ。誰神此御心。
此事お依りて伺ハれざらむ。熟習ふべし。熟思ふべし。
就て思ふ。測ぐとき神の御心をさす。此事は依りて
かく詳み察す奉らる。をまぢる人の心裏の察らゆ
事云ふも更あり。然れハ人とし。成べき限り心
清はしく穢き心を裏におわじ。やがて物よこそ其ハ
吾は知らざらむ。をもし物知人のト問とらむ。彼穢き
心の隠しあや。顕れとらむ。甚も恥らしき事あらば
や。中今ハ世子率らむて。自おむ。人草おの汚き
心持とらむ。其を祓ひ終おむ。事の甚難き事お有
とも人おらハ。免や神おらへと云ふ。古語の
意を忘れざらむ。やうこそ有らま欲ぬ。さて古歌よ。

正しく鹿の肩骨を以て。ト合とる事を詠る。万葉十四。
武藏歌よ。武藏野爾宇良。敝可多也。伎麻左。爾毛乃良奴。
伎美我名。宇良爾低爾家里。可多也。伎左。眞定。師説の如く。肩灼
藏野おして。鹿乃肩を灼て。上るよ。いまだ心裏恋のみし
て。見くを告ざりし。妹グ名のトお合ひ。非う出逢べき
祥ある由を悦べる。あり。さて武藏野よ。て鹿ト。まゝ十五
を為おる事の由縁。第六十段。云ふべし。
巻小。新羅子遣さゆ。雪連宅満。壹岐嶋。よ到て。鬼病お
遇て。死去。ハ。依りて詠る挽歌。由吉能安。末能保。都手乃宇
良。敝乎可多夜伎。互と。ある可多夜伎も。同く肩灼。小て鹿
ト。おる。ぼく所思也。まゝ此哥ある。を非灼の義おらむ。も
ふべし。此おと記傳八。卷三十二。まゝ奥儀抄大江。匡房卿
葉よも論れと。り。合せ見るべし。

歌ふ香山乃波く加が志とふう。冠とけて神祇百首引
と有肩熱く鹿の聲きこゆ。れ巴堀川百首よを妻とと詠
ま志を。此れ故事を思ひてあるは。う冠をけりて心裡
しあさて鹿肩を。龜甲小換と巴し時代ハ何の頃をゆを
云ふあとを詳から祢ど。萬葉十六ふ。車持氏娘子が戀夫
歌ふ。ト部座龜毛莫燒曾と詠るれどぞ。龜トの事此歌ふ
見えとる始終あるべき。今よ龜トの事見え古語拾遺
敘王族宮内礼儀婚姻ト筮事夏冬二季孝徳天皇御世白雉四年小令掌
御ト之式始起此時とあり由有べし。かくて後よを此
ト法のみ弘くありて。鹿トの事を神祇百首ふ。小男鹿ハ
忘ワスきもやせむ問。あとれ。肩熱くトれ道のはるけさ。と詠

るは。實ケ然るあやしく思ふばう。巴小廢セとるハ。甚も慨ウタき
事よこそ。何あ可畏世よあらゆる万の事物神の御心
もあきを其御心御業の知られざる時ハ。少々もさくし
非のまふく。行ひ給ふぞ。皇美麻命の世を政おち給ふ
古道此本於御定ありたる故。上代よ物知人としも云ふ
を。太兆ト事を知まざる人をいふ。稱ふあむ有る。其を風
神祭の祝詞をみても。知べし。さる御政事の宗源とある
考へ集とゆし。信友の功も。愛あべき事ふぞ有る。依
ト料ふ。鹿骨を用ふる因縁ユヰのかくも有むうと思得ある
あとを。上よ云依を。あや此獸れあ。と。信友が考子集と依
説ふ。鹿を獸のあるが中ふ。いせ上代と巴聞えて。古事記
尔。ト料よ用られぬ依文よ。眞男鹿とあるは。牡鹿ツシカあり。眞

は稱辭よて。まゝと佐袁鹿とも云也。佐も眞も稱辭よ云和
名抄ふ。鹿音和名加。牝鹿曰麋音。日本紀私記云。牡鹿佐乎
之加。顯宗紀よも。牡鹿此。牝鹿曰麋。音和名米加。其子曰麋。和名加吳
之見え。鈴屋翁云。万葉集中。鹿字を皆加と訓べし。之加
之必牡鹿也。牡字を添てけり。心著べし。鹿の一字を
ど去れ。鹿く見られ。神代紀。石屋戸。ふ。眞名鹿也。ゆる眞
名を。稱辭お也。愛子を眞名子。万葉ま。出雲風土記。り
あり。云ふも。稱辭あるを思ふべし。小石を。ナゴと云て
ふ。と書依を。稍後よ。ナゴと云て。哥よも。詠り。然。ま。む
ふ。由あるべし。龜兆傳。よ。白眞鹿也。云る。書紀。よ。依て。そ
まよ。白と云言を添と。る。あらむ。さて。此獸を。後。世。ふ。力。せ

ギとも云。行。此。西。行。法師。が。哥。あ。ど。と。さ。て。正。し。と。云
り。見。え。と。り。煩。ハ。し。々。ま。を。考。む。い。を。び。さ。て。正。し。と。云
言。れ。一。必。サ。も。稱。辭。ある。を。疊。て。誤。違。ふ。こと。を。死。を。稱。と
る。言。お。依。べ。し。上の違ふきを。ト。サ。と。云。ひ。ま。と。ス。ラ
ヲ。と。云。也。正。心。男。よ。て。則。サ。ウ。を。切。免。て。ス。あり。益。荒。と。書
く。ハ。借。字。あり。此。語。を。別。よ。委。く。考。へ。記。せ。る。物。あり。ゆ。さ。て
此。正。心。男。れ。也。あ。ま。ふ。就。て。思。ふ。よ。所。殺。迦。具。土。神。於。頭
所。成。神。名。正。鹿。山。津。見。神。と。あ。依。迦。具。土。の。香。山。ふ。か。と。ひ。
正。鹿。の。眞。名。鹿。ふ。り。と。ひ。て。聞。也。る。を。由。あ。也。げ。お。也。今。云。よ。を
実。ふ。由。ある。こと。あり。其。香。山。の。迦。具。土。神。よ。由。ある。事。ハ
第。十。五。段。よ。い。ひ。正。鹿。山。津。見。此。鹿。よ。由。ある。事。を。彼。処。よ
も。云。ひ。お。第。百。十。三。段。天。迦。さ。て。鹿。は。獸。れ。依。ぐ。中。ふ。
具。神。の。処。を。委。く。云。ふ。べ。し。さ。て。鹿。は。獸。れ。依。ぐ。中。ふ。
上。代。々。也。聞。え。て。古。此。世。く。ふ。奇。死。故。事。れ。聞。也。る。を。殊。よ

奇しく、神ある獸あるが故あるは、カスリガリ万葉十六小、カスリガリ藥獵仕、
奉る時、カスリガリ爲鹿述痛作之歌。鹿を獵カスリガリ紀とを、藥獵と云ハ、
猪鹿をシ、と云ハ、穴獵と云モ、古も古まあり、梓弓矢手ばさ
古も天皇よも、此肉成死で聞食とるれ也。梓弓矢手ばさ
み云く、ちく待おと吾居ると、死ふちを鹿の云く、王よ吾
は、仕牙む、吾角を御笠のはやし、吾耳は御墨、此堪吾目ら
を、眞澄の鏡、吾爪を御弓、此弓弭、吾毛らは御筆の林、吾皮
ハ御箱、此皮糸、吾穴は御膾をやし、吾肝も御膾をやし、吾
美義を御鹽のをやし、云くと何也。如此むあり用ある状
る由を詠ざるハ、思ひ寄ざりしよ、也、既もその頃を、普く
ト、おを用ひざりし、お依て、知ざりし、おや有む、今云、上、お
引る神祇百首の、おを、お忘、たのを、既も、山里人共、此
もやせむ、云く、思ひ合、おべし。

物の、これ、カスリガリ依を、彼此、きく、置おるや、カスリガリ鹿を、獸の、ある、カスリガリ中
ふ、其性、直く、大飛、カスリガリう、カスリガリおて、カスリガリ親子、カスリガリ牝牡、カスリガリ此、カスリガリ感、いと、カスリガリ厚く、カスリガリ鹿の、カスリガリ妻
と、カスリガリ古、カスリガリと、カスリガリ感、カスリガリがりて、カスリガリ哥、カスリガリよも、カスリガリ多く、カスリガリ詠、カスリガリおれ、カスリガリと、カスリガリり、カスリガリ今、カスリガリ云、カスリガリま、カスリガリと
此、カスリガリ事、カスリガリ委、カスリガリく、カスリガリ仁、カスリガリ徳、カスリガリ天皇、カスリガリ卷、カスリガリ夢、カスリガリ野、カスリガリの、カスリガリ鹿、カスリガリ此、カスリガリ処、カスリガリに、カスリガリ注、カスリガリふ、カスリガリべし、カスリガリま、カスリガリと
癡、カスリガリ愚、カスリガリある、カスリガリが、カスリガリ如、カスリガリく、カスリガリお、カスリガリれ、カスリガリと、カスリガリ敏、カスリガリく、カスリガリ殊、カスリガリれて、カスリガリ聰、カスリガリく、カスリガリ朝、カスリガリ野、カスリガリ群、カスリガリ載、カスリガリある、カスリガリ中、カスリガリ臣、カスリガリ祭、カスリガリ文、カスリガリよ、カスリガリハ
百、カスリガリ万、カスリガリ乃、カスリガリ神、カスリガリ等、カスリガリ佐、カスリガリ乎、カスリガリ志、カスリガリ加、カスリガリ乃、カスリガリハ、カスリガリ御、カスリガリ耳、カスリガリ乎、カスリガリ振、カスリガリ立、カスリガリ天、カスリガリ聞、カスリガリ食、カスリガリ止、カスリガリ申、カスリガリと、カスリガリ何
る、カスリガリも、カスリガリ由、カスリガリある、カスリガリ事、カスリガリあり、カスリガリ○、カスリガリ今、カスリガリ云、カスリガリ此、カスリガリ事、カスリガリお、カスリガリ不、カスリガリ委、カスリガリく、カスリガリ論、カスリガリひ、カスリガリと、カスリガリる、カスリガリを、カスリガリ其
を、カスリガリ予、カスリガリが、カスリガリ大、カスリガリ祓、カスリガリ詞、カスリガリ本、カスリガリ草、カスリガリて、カスリガリふ、カスリガリ漢、カスリガリ籍、カスリガリよ、カスリガリ靈、カスリガリ獸、カスリガリある、カスリガリ由、カスリガリ云、カスリガリる、カスリガリも、カスリガリ由、カスリガリ縁
何、カスリガリ依、カスリガリ説、カスリガリり、カスリガリて、カスリガリい、カスリガリお、カスリガリま、カスリガリふ、カスリガリも、カスリガリ神、カスリガリ代、カスリガリを、カスリガリゆ、カスリガリ在、カスリガリ聞、カスリガリえ、カスリガリと、カスリガリ依、カスリガリ奇、カスリガリと、カスリガリく、カスリガリ神
神、カスリガリし、カスリガリ死、カスリガリ獸、カスリガリお、カスリガリぞ、カスリガリ有、カスリガリる、カスリガリと、カスリガリ云、カスリガリ也、カスリガリお、カスリガリ不、カスリガリ此、カスリガリ獸、カスリガリの、カスリガリ事、カスリガリ小、カスリガリ就、カスリガリて、カスリガリを、カスリガリ予
そ、カスリガリは、カスリガリ此、カスリガリ獸、カスリガリの、
事、カスリガリ此、カスリガリ出、カスリガリと、カスリガリる、
其、カスリガリ処、カスリガリく、カスリガリお、
云、カスリガリふ、カスリガリべし、

於_コ是_ニ天_{アマノ}兒_コ屋_ヤ根_ネ命_ノ以_テ天_{アマノ}香_カ山_{ヤマ}出_ル
 而_テ於_ニ上_{ホツ}枝_エ取_{トリ}著_ツ其_ケ天_{カノ}明_{アマノ}玉_{タマ}命_ノ出_ル
 所_ス作_レ出_ル八_ヤ坂_{サカ}瓊_ニ出_ル曲_ノ玉_{タマ}於_ニ中_{ナカ}枝_エ
 取_{トリ}繫_{カケ}其_ケ天_{カノ}香_カ山_{ヤマ}命_ノ出_ル所_シ作_レ出_ル八_ヤ

咫_タ鏡_{カミ}於_ニ下_{シタ}枝_エ取_{トリ}垂_リ其_ケ天_{カノ}日_ヒ鷲_{ワレ}命_ノ
 出_ル所_ハ作_ケ出_ル由_ユ布_フ而_テ此_コ種_ク種_リ出_ル物_{モノ}
 者_ハ天_{アマノ}太_フ玉_{タマ}命_ノ取_{トリ}持_テ太_タ御_ミ幣_ヒ而_テ天_{アマノ}
 兒_コ屋_ヤ根_ネ命_ノ太_タ祝_{イハヒ}詞_{コト}言_フ禱_{イハヒ}白_{クハ}而_テ神_{カミ}
 祝_{イハヒ}祝_{イハヒ}出_ル

根許士爾許士而は。御紀ネコジに拔ネヒキまゝと掘ネヒキとも見え。師云。古語拾遺ネコジに掘字を書て。古語佐禰居自能禰居自と見也。今云。佐を称辞よて根。万葉八小。去年春伊許自而植之吾屋外之若樹梅者花咲爾家里。拾遺集ネコジよハ去し年根あじて植しと直して入と也。古今六帖ネコジに秋野を根許士ネコジに注して持去とも。巖の種ハ遺しやはせぬ。おと詠て。根おぐらよ掘取を云。俗ネコジいふ根引ふけるあり。物をこじると云俗語。と何也。けり前よ取れ依を。八十玉串と有を思ふ。小。莖葉此ふさやうぬる枝を取て。齋場イニハに指立て。飾カザリと爲とるお依ネコジはく。此あるハ。鏡王おとを著ネコジはき料おまハ。殊ネコジに大ぬる枝根掘取れ依ある

ばし。さて此を誰神の取れりと云ふことハ言。補。○上枝。中枝。下枝は。師云。譽田。天皇御歌。まゝ雄畧。卷三重。姦メカが歌。小本都延那加都延志豆延とある。お依て訓ネコジはし。下枝を。彼姦が。哥の中よ。三とび出とる。二を志豆延といひ。一志毛都延と云也。今を此。彼多きお依れり。まゝ。万葉おとよも。本都延。志豆延と。此枝の上中下お就て。著し物の尊卑を言は。多くよ免也。餘言痛し。あゝ尊卑死由あらげも。玉を上鏡在中。和幣は下お著て。宜しかるはき物のさほお也。中を守ぶおと。意ネコジに強言あり。○其八坂瓊之曲玉。其字を私ネコジに加す。於下ぬあるべき也。さて曲玉鏡和幣。これ上お注へ也。○取著を。師云。万葉三。小。奥山乃賢木之枝。爾白香付木綿取付而。今云。

世よ麻あを白しろ髪かみと云いこと此こゝ哥うたふ依よるる古ふる占うらりの倣なまありなり也なり。ははと十七しちふ之の良よ奴に里り能に鈴すず登のぼ里り都みやこ氣き底そこおおぞもも何なにゆ。○取と垂た師し云い皇みかど極たぎ紀きよ折し取と枝え葉は懸か掛か木き綿わた云いく。万よろ葉は六むふ木き綿わた取と之の泥どろ而を。而を。延の喜き六む年ねん日本にほん紀き竟つひ宴うたげ得え太たい王わう命みこと物もの部ぶ安やす興かみ歌うたふ。比ひ佐さ嘉か多た能の阿あ麻ま互たが流なが呵あ美み乎や伊い能の留とど度た曾そ要よ多た母はは須す惠ゑく爾なんぢ奴に佐さ波な志し互たが氣き留とどおおど何なにゆ垂たを志し殿たねを訓し志し陀た禮らいを約やくとる言いおお也なり。陀た礼らいを殿たね孝かう德とく紀きよ垂た此こゝ云い之の娜な屢らむ方かた葉は十じゅうふ垂た柳やなぎ十一じゅういちふ四し垂た尾おしおおど有あもて知しべし志し陀た留とどハ繁しげ垂たの意いおお也なり。方かた葉はよ竹たけ玉たま乎や繁しげけけて此こゝ垂たてふ言い多た理らい多た流ながおおと云いむ。自然しぜんるる多た禮らい多た流ながくおおぞ也なり。物ものを然しかるる何なにゆ。多た令し

垂た多た流ながくを令し垂たあり凡たゞて活い言いむ皆みなこの差さ別べつあることぞ。されを志し陀た理らいと志し陀た禮らいとをも此こゝ差さを以もつて別べつし。右みぎの柳やなぎままと尾おしおおど也なり。自みづか垂た此こゝ在あり物もの子こ垂たらせあるおおまま也なり。志し陀た禮らいを約やくて志し殿たねを云いれり。後のち物もの四よ手てと云い物もの也なり。此こゝ用語ようごを採と物もの歌うたふ。賢けん木き葉はふ木き綿わた取と垂た也なり。名なとせせるあり。採と物もの歌うたふ。賢けん木き葉はふ木き綿わた取と垂た也なり。誰たれ代しろり。神かみの御おん諸しよと齋いひひそ米こめ々々也なり。二ふたの句く拾しよ遺いも也なり。拾しよ遺い集しゆふ。石いし上うへふるや壯たくま士しの太たい刀とうもかか組ぐみの緒いと垂た也なり。○此こゝ種しゆく之の物もの者もの。景けい行ぎやう天てん皇わう紀き仲ちゆう哀あひ天てん皇わう紀きああぞふ。賢けん木き此こゝ枝えよ。鏡かがみ釵かんざし玉たまを著つて天てん皇わう命みことふ獻けんする事ことの有あは。此こゝ段だんの故ゆゑ事こと依よままる。古ふるの禮らい儀ぎおお也なり。此こゝと委あづかりり弟あに男おとこ命みこと此こゝ大だい御おん神かみふ蓼れう雲うん釵かんざしを。ささて中ちゆう昔せきままでも。人ひとふ物ものを贈くわ

る。多く木草此枝に著してし。師説の如く。此段の神
此枝に於る故事を。起れることをあるべし。○太御
幣。師説ふ。和名抄ふ。幣美天久良。靈異記ふ。幣帛美天久良
あど何。太は稱辭あり。ま。と。宇豆乃幣帛。大幣帛。伊都幣
美。豆具良。ハ何物にるれ。神に獻物の總名なり。諸祝詞あ
ぞ我見て知べし。名義は。ま。古。子。神。に。獻。物。ま。人。に。贈
巴。あ。ぞ。衣。物。を。凡。て。久。良。と。云。ゆ。也。後。世。の。語。は。人
久流と云も。是より。其を古事記ふ。千位置戸とある位。今
出。と。事。ある。べし。故。ま。と。貞。觀。儀。式。大。嘗。祭。條。に。倉
位。字。を。書。る。を。借。字。あり。故。ま。と。貞。觀。儀。式。大。嘗。祭。條。に。倉
この史にハ座字を書け。ま。と。貞。觀。儀。式。大。嘗。祭。條。に。倉
代。十。輿。代。を。実。り。て。續。後。紀。一。ふ。因。造。出。雲。豐。持。等。奏。神。壽。
即。其。物。を。云。

并獻白馬一匹。生雉高机四前。倉代物五十荷。此因造神吉
馬鶴と共に。劔鏡を奉獻。例神龜三年。紀に見え。ま。と。五
種。神。宝。雜。物。を。獻。上。例。大。長。七。年。紀。に。見。え。ま。と。彼。神。賀
詞。よ。白。馬。白。鶴。の。外。小。玉。横。刀。鏡。ふ。と。獻。る。と。有。れ。ハ。此。倉。代。物。と。を。か。の。種。の。物。を。い。へ。云。あり。ハ。と。
何る倉あまあり。倉字も借。は。美。豆。を。御。手。ふ。て。後。小。天
皇命此御手おくりら神に獻て給ふ物を。御手久良と云ひ
習子依。其名を始へも廻らして。此段も然云。子る依
ばし。今云。此外。不。言。れ。し。説。の。ま。と。信。ぐ。と。く。所。蜻。蛉。日。記
思。れ。た。此。に。ハ。漏。し。於。記。傳。ハ。卷。見。る。べし。所。蜻。蛉。日。記
ふ。美。豆。具。良。一。夾。二。夾。と。何。る。を。絹。布。あ。ど。を。串。ふ。夾。み。て。
奉るを云。ハ。大。神。宮。年。中。行。事。に。寮。幣。者。長。串。用。紙。扱。也。○取持而師云。凡。多
御幣を取持。と。を。此。時。の。例。に。隨。ふ。後。の。御。代。く。ま。で。

忌部氏の職業あり。次引る書どもお洽く見也。まゝ神代紀下巻小使太玉命以弱肩被太手禰而代御手以祭此神者始起於此矣。此神とハ大物主神あり。依て御手と云あり。御手と云ふ心を付べし。多し。代りて祭やのみ見るハ精ひらひ。まゝ祈年月次大嘗等祭祝詞辭別ふも。忌部能弱肩ふ。太多須支取挂氏持由麻波利仕奉禮留幣帛乎。神主祝部等受賜氏事不遇捧奉登宣と見也。諸の御幣を造り備る。あや此氏の職あり。書紀ふ。忌部遠祖太王者造幣云々。古語拾遺小宜令太玉神率諸部神造和幣。物を云り。和幣ふ限らば。まゝ令天富命率日鷲命之孫云々。殖穀麻種云々。天富命更分阿波

齋部率往東土播殖麻穀云々。まゝ令天富命率供作諸氏造作大幣。命の孫あり。天富命と太玉。四時祭式小祈年祭云々。前祭十五日充忌部八人木工一人令造供神調度あど見えと也。○太祝詞言師説ふ。五葉十七小中臣の敷乃能里等其等いひはらす。書紀ふ。使天兒屋命掌其解除之太諄辭。太諄能理也。此大祓詞ふ。大中臣天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。あまらむ祓除ふ宣を云也。まゝ月次祭祝詞ふ。天照坐皇大神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎云々。鎮火祭祝詞小如横山置高成氏。天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止申あどあるを。此乃祝詞の趣ある。名義を宣説言

あるはし。能流を必しも貴人此命あらざるも。人小物を言
聞はるを云。彼大祓詞。大中臣小宣と云るが如し。その
書れとまど。宣とり告。説書紀。太諄辭と書る諄字。説
字其義ふ合ふべし。告曉之熟也。とあり。また韻會。朱倫切音与屯同。廣韻
至也。誠懇。良程。伊川曰。厚也。朱子曰。懇至。良亦廣韻告之。丁
寧也。と。此意。久度。久と云言也。此の也。死ぶと此意
も有り。久近し。俊頼歌。はし。死ぶ罪。此おもりのか。あしさを。
ぬりのある。くど。死ぶる。形。今云。加茂大人此詔。賜
の辨へらま。とる。が。如く。何。が。れり。言ありと説れしハ師
さる。此。哥。此。意。を。下。委。く。云。べし。け。て。能。理。斗。と。常。小。云。
右。言。を。畧。け。る。れ。也。祝詞。字。を。書。お。と。を。師。を。此。言。の。本。意
賜。と。心。得。ら。ま。と。る。故。あり。此。事。を。神。祝。く。之。と。も。書。紀。小
あ。ま。む。彼。字。本。意。ふ。叶。を。交。と。も。云。う。と。し。説。文。み。祝。祭。主。

賛神者。あど。ある。を。此。の。義。み。符。へ。也。さ。て。能。理。斗。を。能。都
斗。ま。と。能。斗。あ。む。云。ハ。訛。あり。又。ノ。リ。ト。を。後。も。表。白。と。云
り。此。を。宮。主。口。を。何。也。猶。次。小。云。は。し。○。禱。白。而。師。云。泥。疑
傳。抄。み。見。也。麻。袁。志。氏。と。訓。は。し。禱。字。本。岐。と。も。能。美。と。も。訓。る。是。等。此
言。を。古。書。小。考。る。ふ。本。具。を。祝。壽。方。小。云。ひ。能。牟。を。乞。祈。る
方。小。云。ひ。泥。具。を。右。の。二。方。を。兼。ある。言。あ。也。○。神。祝。く。之。
本書。み。此。云。加。武。保。佐。枳。保。佐。枳。く。と。何。ゆ。神。を。神。議。神。集
れ。ど。の。神。ふ。て。尊。辭。あ。ゆ。富。邪。久。を。今。俗。ふ。も。同。事。を。丁。寧
反。復。し。言。を。か。く。云。こ。と。の。有。は。古。言。の。遺。を。依。あ。ゆ。谷川氏も
既。く。或。謂。今。俗。不。慝。情。而。益。言。漢。籍。周。禮。み。大。祝。掌。六。祝。之
曰。保。佐。久。蓋。祝。之。遺。也。と。云。り。漢。籍。周。禮。み。大。祝。掌。六。祝。之
辭。と。云。ひ。字。典。小。祝。丁。寧。也。請。求。之。辭。と。何。ま。む。富。邪。久。と

云ふ祝字はよく當れ也。但し今俗に富邪久といふ言ふもの言やう此こと或を醉とれとる人此操言はるおぞを此み云免をむあり。はて富邪伎富邪久と疊と依ふ就て餘の疊言此例を思ふ。神集く。神議、議神逐く。稜威之道別道別おとの類。おの餘も全剝く。も皆この例をた。凡て集ひとる上ふまはく集ひ議れして辨ふべし。る上ふもお布密ふ議也。逐やらふを天上うをたう。葦原中固子母住せじと逐や也。道別道別を遙けき天道の雲霧をう此分け押分け天降れる由外るおどを合せて思ふ。此も其如くふて富邪久と云を。反復し請祈ことふハ有れど。猶丁寧も反復し。其事を禱白せる由ふて。上

ふ師の引きとる。俊頼歌ふ。波も米外き罪の扱も也此悲さを然う此聲くくとき扱るうあ。と詠るも。よく此符

ひて聞ゆまむ。神も禱言を白けせしては。其言を反復し扱。手拍ち額突き。拜むう。姿も限也無く。丁寧ふはるぞ。

古此道あり。依。お布此事を正しき證を得て。考と依説太詞事の処。委く。さて此歌詞ふ。くぞくと云る詞の意

注をを見る。は。信友説ふ。諄説ふて。心裏も念ふ事を人ふ向ひ。周諄説

としある。は。系を操おと云。クルも同。おと。其を人ふ對

ひて言ふ上の詞おがら。亦獨言はる上も然云。は。きお

也。俗言もクドクと云も。我が然為むと思ふことを人ふ

れる言状お正しくまぐと云も。さて額比聲く七額突て。クリドの訛れる言あるべし。上句は佛道の意。此等哉以て乞祈くくはる状と聞也。論ふも足らば。思子む。古神小申は祝詞も。及復しく申て。乞祈しある。るし。書紀了。太祝戸言を。大諄辭と書れしも。此義を得て。ぬるべしと云也。此説予が考ふとく符牙也。おち因お思言も。物ふまれ事ふまれ。結ぶまを。解く意あま。言の本を同じる。あべし。

爾集常世長鳴鳥而互令長鳴。

今世鳥名子以天手力男神隱長鳴出縁也。

立石戸出側而以天宇受賣命。

亦云天於爲神樂出長而採天受賣命。

香山出竹於其節間彫孔而吹。

鳴。今世笛木木合合而備安樂。

出聲。天加奈止美命興竝天香。

號鳥名子則金雞長鳴縁也。と有を取て文を成せ也。はて
 鳥名子此こと。内宮年中行事。六月廿七日。御祭の處
 小。謂ゆる三節祭。從西尅許。鳥名子等參候。於瑞垣御門外。
 擊志太良叩手也。尾張よて。予等のてうち。を。あ。と。ら。の。諸
 人。諸共よ。手をう。拍音。レ。タ。ラ。と。聞。も。ま。む。云。あ。る。の。業。師。の。太。人。の。説。は。て。明。り。れ。り。件。の。手。を。拍。ひ。云。こ
 と。を。稱。て。斯。多。良。と。い。ふ。名。義。ハ。即。ち。此。手。を。う。ち。あ。く。と。音。と。り。や。出。於。ら。む。其。木。竹。あ。ど。の。類。を。う。ち。あ。く。音。と。ハ。異。正。て。己。の。弱。ら。う。所。垂。る。手。を。う。ち。あ。く。と。互。に。拍。子。を。と。り。て。手。を。う。ち。あ。く。音。の。自。ら。レ。タ。ラ。と。聞。也。ま。バ。あ。正。今。此。俗。言。ハ。ビ。タ。と。手。を。う。ち。あ。く。と。も。云。ひ。又。ペ。タ。リ。と。い。う。つ。と。も。ピ。リ。ヤ。リ。と。い。う。つ。と。も。云。ひ。又。と。も。云。ふ。言。こ。れ。全。く。同。じ。意。む。へ。お。こ。そ。有。め。ま。謳。歌。
 件歌之中志多良宇テトテ、カノタエ波宇知波牟倍利。

奈良比波牟倍利。阿古女乃曾天也。禮氏波牟倍利。於比仁
 也。世牟。多須伎仁也。世牟。伊佐世牟。伊佐世牟。多可乃乎仁
 世牟。又云。志多良波志利宇知。大津乃濱倍。行波阿不毛乃
 加波多知由加佐牟。又云。志太良波余彌波也。加波く佐計
 久美阿計天毛禮。止美乃津加比曾。又云。伊計保良禮余波
 知須波和禮宇惠牟。波知須我宇倍仁。奈女久良太天良禮
 余。又云。伊佐多知奈牟。遠志乃加毛止利。美都麻佐良波。止
 美曾麻佐良牟。哥難多不委記歌畢後參候荒祭御前同勤仕。其
 後於舞姫候殿預饗膳と見え。此謳哥どもものおと大抵ハ聞えとれど又中ハ誤
字脱字うと思ふ所も有て委くハ解がとくハ論
ハむ事も中く煩ハしく所思れむ此よ云ハ別よ神

樂哥注解と云を著さむと云。御祭去みて祭使宮司を始
其書の出るを待て見るべし。御祭去みて祭使宮司を始
終。各々直會饗膳小預正。倭舞畢の後の事を記して。次自
舞姫候殿。鳥名子所下部等。相具鳥名子等。於齋王候殿與
舞姫候殿中間謳歌吹笛。又此職掌人之中二人自四所職
掌人之手。請取御琴持參會。其時搔奉仕御歌十二首。一。天
ふゆや。八鴈が中あるや。我人の子。さあきともや。八鴈が
中あるや。我人の子。二。路此邊此木橋を。ふさをり持は。誰
子外依らむ。三。遠江。そ外さの山乃椎が枝字。ふさ折もて
ば。いまろもぞる。四。いとくぞぞいふ。君が世を。千世とぞ
いふ。千世とぞいふ。紫の帯をぬれて。いざや阿そばむ。五。

大宮の前此阿らきまどれ。阿られ阿られ。あが加えへバ
ぞ。扱まもそろふ。六。大宮此前の川のおと。川のおかさ。い
後も長く。と見もあまへ。七。山川おむむや。おし此女鳥
ましや。此とふ。七度妻戀あるや。八。山川おぬてる。黒免は
あソ。まさふくや。ときあみて。おどりかけて。いざや遊ば
む。九。みあみあき鳥ば。うぬぞある。あられふり。霜たぐ
夜。夜ともさだ免は。十。大川柳はむろくて立依。大川柳
ときアコニテ。おどりかけて。いざや阿そばむ。十一。濱お出
て。阿そぶ千鳥。おく阿や。あまき。小松が上ふ。阿みあお
れそ。十二。橘が本お道をふさて。かぐはしや。わがかえへば

ぞ扱おもそふ。已上十二首。次第如此。畢之後。阿麻乃オヒ
阿麻乃オヒ十三度申。鳥名子等組手廻く後各頭聚一所
伏。其後起各合手後退出也。件職掌人忌火屋殿上御琴退
出也。と見え。此哥どもの解説も上云ぐ如く。神斯して
東寶殿乃雄戸推。雌戸此本字差。荷前の御調糸を納免
奉正て後の處も琴生笛生歌長。鳥名子等各勤役奉仕。
于時司中人長各申名奉仕。先宮司引裾進參半疊下穿沓
跪倭舞左右左拜如常云く。酒立女進以三角柏盃預御神
酒地祭物忌父兄部獻之。一端取之吞取副笏對揖之後左
廻拜御前著本座。次神主同前。但右左次祭使同前。但左右

云く。鳥名子舞廻。其後各退出。祭使宮司自南。神主自西也。
也見也。餘の御祭鳥名子の事見えざれば。此は依て考
三節祭此時此み仕奉ると聞えたり。此は依て考
るふ。鳥名子といふ稱の義を。雞鳴子。あて天岩屋戸の前
みて長鳴せし。欠とる雞小比て置れとる故の稱と聞え
る也。組手廻り後各頭聚一所伏あど云斯て鳥名子此長
鳴とは。此餘ふ舞を仕奉依人く此謳ふ歌を。一二首ふ過
ざ依を。鳥名子が謳ふ歌を甚多うまをあるはし。此はさむと
ふ哥の多うの事を。雞の長鳴しと依り比て。殊更に多
多く謳をし欠とる古く此の定ある事を云も更れぬ。け
て大神宮式ふも。六月月次祭此條ふ右月十六日祭度會
宮十七日祭大神宮云く。給酒食訖入外玉垣門供倭舞先

神宮司次禰宜次大内人。次幣帛使。次云々。次禰宜大内人、
妻訖齋宮女孺四人。供五節儻。次鳥子名儻。十七日參大神
宮。其儀一同。と見え。禰宜内人等装束。此條。凡三節祭并
解齋直會之日。鳥子名儻。童男童女十八人。装束。青摺衣裳。
在前摺備臨祭給之。料布十二端。男二丈八尺。女二丈五尺。彈琴二人。笛
生二人。歌長三人。料布三端二丈。人別二丈。年終各給其身。と何
也。然まむ鳥名子とて。別ふ立置。依職掌。ふを非安て。其
節。小童男童女を撰びて。任し給ふ事。あゆむ也。然るを
社註式。鳥名子。地下駈役者也。と註せるを。例のいと漫
あることありかし。侍て餘の書等も。鳥名子と有るを。
式。よむ。二所とも。鳥子名と何る。○天手力男神。手力と
む。いと不審し。何まう。是あらむ。

負坐る御名の義也。下第五十六段。云ふ。云々。万葉三。石戸
破る手力も。ぐも。十七。春。此花云々。折てのけむ。多治
可良。むの。式。よ。紀伊。因牟婁郡。天手力男神。社。文德天皇。
紀齊衡二年七月。以紀伊。因天手力男神。預於官社。あど見
也。○石戸之側也。大御神の幽居。坐まは。石屋戸の掖。あ。也。
○隱立也。師の加久理多知氏。と訓む。ぞ古言。あ。依。推古紀
句理摩須沼河比賣。歌。比賀迦久良婆。と云。依。と。言。れ
とあり。多。む。と。此。也。此。神。自。ら。の。御。心。也。隱。思。兼。神。の。謀。小。依。て。諸。
多。む。と。此。也。此。神。自。ら。の。御。心。也。隱。思。兼。神。の。謀。小。依。て。諸。
神。此。然。令。爲。給。へ。依。あ。む。也。迦。久。斯。多。底。天。と。訓。は。し。侍。て。
此。處。也。此。神。を。隱。立。せ。る。由。ハ。次。段。よ。て。知。べ。し。○常。世。長。鳴。鳥。云々。

の古と記紀とも小思兼神の思謀とるへる。最初の処に
記さむとれど文の連続に必此在る事あり。事
状を思ひ辨ふべし。ま手力男神云く。この御紀に
鳴鳥云々のさし。次子有る。宜心れ。余れ諸事と
天。宇受賣命云く。有る。此記に。天手力男神。立戸掖而
天。宇受賣命。天於受賣命。名義師云。古語拾遺云。天鈿女命。
古語天乃於須女。其神强悍猛固。故以為名。今俗強女謂於
須志此縁也。此注を思。小此書の傳。ハ於受賣とあり。今云。古の古語拾遺の傳。ハ依る。時ハ於受賣と云。在正稱。として。宇受賣といふを。亦云。云稱と為べき。如く。亦受賣を。亦御名と定免。於延喜七年。進大神宮譜圖帳。此段の事を云。る。小も。天乃於須女とあり。源氏物語。帚木卷。小。例乃腹立怨びる。小。かくおぞましくは。いみじ死契。淡

れとも。絶て又見じ。河海抄。ハ形遠。はと夕霧卷。小人聞。も。う。あて。控。び。乃。しか。る。べき。已。け。を。ま。多。東屋卷。子。物。抄。く。み。せ。び。疾。也。加。小。ね。ぞ。き。人。小。て。は。と。浮舟卷。子。浮舟君の。川。小。身。を。投。む。と。思。ひ。く。れ。依。こ。と。を。云。る。處。小。び。あ。し。お。び。か。る。は。き。あ。を。思。よ。る。亦。を。む。り。し。形。ど。あ。る。皆。婦。人。の。存。と。を。云。て。右。の。意。ち。ゆ。和名抄。小護田鳥。於須賣止。里。常在。沢中。見。人。輒。鳴。有。似。主。守。宮。故。以。名。之。と。あ。る。此。神。名。々。り。出。と。る。名。あ。る。べ。し。今。云。此。事。篤。胤。別。よ。考。あり。下。第。五。十。七。段。大。宮。能。賣。命。の。処。小。今。世。言。小。も。於。曾。伊。ま。と。於。受。伊。と。云。こ。と。何。也。ま。云。は。し。今。世。言。小。も。於。曾。伊。ま。と。於。受。伊。と。云。こ。と。何。也。ま。い。や。し。き。言。小。延。受。伊。と。い。ふ。こ。ち。て。此。神。の。強。固。こ。と。下。と。有。も。是。々。り。轉。れ。る。あ。る。べ。し。ち。て。此。神。の。強。固。こ。と。下。文。ま。と。猿。田。毘。古。神。の。段。小。見。也。今云。宇受賣神。下。よ。次。く。見。と。如。く。太。じ。き。

功乃神小坐まはを誰神の御子と云こと諸書小見えと
る事なく又神名式よ此神名此社ぞてを一社よ有こ
と無くまよ式外小も此神を祭れる社のをさく聞也
依ことれきた不審き事あり篤胤が思ふ由を下第五十
七段大宮賣神○爲神樂之長而古を上代本記小此を御
の処云べし鎮座本記あるを元く集み此名をもて引る処あ
る故よその古名ある事を去めてかくを引扱凡神樂
之起猿女君祖天鈿女命採天香山竹其節間雕風孔通和
氣今世号亦天香弓興竝叩弦今世謂和木く合而備安
樂之聲云くと見え神祇本原元く集あどま引る古語小
も此時の神遊乃故事を記せる處小人長者猿女君祖天
鈿女命也と有小依て記せ也そは次よ考て注せざる如く
笛を吹るを天香山命ある
べく琴を弾と依ハ長白羽命あるを上代本記よ共よ字
受責命小係あるを思ふべし古ま此命の樂長として事

執らちく小餘書ど安ふも神遊の起原をた凡て此神小
依てあり係カケ了言傳とレして樂を阿曾毘ヒと訓べし其を師説よ阿
曾毘コトヒキマエキクテヒウ管弦歌舞とぐひを云て樂字小當まゆ和名抄よ
雅樂寮宇
多麻比乃豆加佐と見え顯宗紀よ奏樂あどある訓後世
宜く聞也まぎもあ不思ふ小阿曾毘と訓ぞとけむ後世
よも此段の樂を即神遊チカニシヒと云也神樂あり神樂歌を古今
集ふを神カのそび此歌ぞあ依ふて知法し神樂字カグラ
と云こと古
書よハ見えび○今云縣居大人も神樂哥注よ神樂ハ神
のそびと唱ふべし樂の事を後の物語小あそびと云り
かぐらを云た後世れ言よて古書イあきことあゆや言
れとれど此ハハとる古書小洩とるよて信おを古言
あるべく所思る由あり其を五十中昔此物語書あ抒ふ
六段噓樂の処よ注ふを見るべしあそびがくと重祓ても云
も管絃コトヒキマエキをキはら御遊アソビと云ゆ

与兩節間云筵とも有也。まご名義抄云筵ハ竹ノヨトあ
也。かく此如く。余は兩節間あり。布斯を其餘の隔あり。六
帖云。吳竹の志げくも物を思ふり。一とへふおるふし
此おらさふ。狛朝葛記今様歌云。竹此とあひく。阿ハれお
依ふし。もはあおびか死るお。云く。と有ふてをく通と
也。今云古今集。木小もあらは。草もあらは。ちて余と
竹の之此と詠るも。節と節との間を云ぬ。竹節の間
は。此をゆ彼までと限也。ある間此おとあり。故竹節の間
を余阿比とも云ぬ。余波比とも云ぬ。アハ。通をせ云依お
也。人おいふ齡も。生のうぎ也。の間を云ふ。とのあぐ人を
人と云。然云ふ余をゆ轉りて。ひろく世中とも云るあり。

也云るを然る説ふて。世代おど此字を余を訓むも。言此
本を同じ。是ふ就て思ふよ。人壽の長うらむおとを祝て。
竹杖を贈依こせも。由阿也て所思也。其在拾遺集云。一節
ふ千歳字おむる杖おまむ。おくとも盡じ君ぐをはひた。
と詠るも。知はし。壽命の長うらむおを祝て杖をも
み思ふた。古を考す。伊邪那岐命。豫母都圀を還坐。比追給ふを
塞て。その御杖を投て。乃へる。小來名戸之祖神の成坐て。
この神豫母都圀を。荒ひ來る物を追却と。る。御功ま
せむ。此謂。よゆて人の禍事を拂ひ。齡を延る。意よて神
ふも。奉也。人ふ杖を。与ふ事ハ。古く。有りむ。とた
ふ也。其た神樂。採物ふも。杖を。ありて。皇神の御山の杖を
山。大。此千歳を。祈り。きれる。御杖。ぞと。ある。を。以て。然を
思。を。依。かり。然。依。を。後。よく。さ。○彫孔。而は。阿那乎。保理
ぐ。さ。漢説。を。交。へ。さ。る。れ。依。べ。く。

氏と訓べし。○吹鳴也。本は通和氣と何るをそを漢布伎
 那志を訓ばし。鳴を那志と訓てやハ。古事記に畫成の成
 小此字を書て。訓鳴云那志を何るを。師説に古に琴を彈
 鳴を比伎那須笛を吹鳴を布伎那須鼓を打鳴を宇知那
 須おど。凡て鳴字那須といひし故小借まるおゆと言ま
 去小從ま也。○今世笛類也。笛を和名抄よ。布江を何也。布
といふ名義をもと吹き吹くおといふ用言の吹を音便
よ布伊と云ひ伊を延ておとしく轉る音なる故小かく
も言るが遂小此物の名をなまるお依べし職員令よ鼓
吹正をツツ三ツ正と訓み神代紀よ伊井冉等の御
魂を祭るおとを云るおよ鼓吹とあり諸越おてもツツ
三ツ正の鼓吹と書あり和名抄よ横笛不論唐拍是横
吹之惣名也や有ふても布延てはて此文小依て考る小。
吹の轉語ありとを知られと也。

此時作ま依を正しく笛と云はり也此物よを非で節と
 節との間を用て風孔を雕て童子の持何そぶ比伊比伊
 せいふ物此状おど小作ま也しおて。此といふと云名をその
は彼横笛と云もれく状よを非ざ也し故小笛類也と云
云るおらむ。大抵物の始まりいかに常陸風土記に崇神天
皇御世小建借間命此東國の荒賊を平治る處に天之鳥
琴天之鳥笛と云をもて遊樂しとるおと見也。此を何お
る形の笛おゆらむ。今知法くらげ。今世よも鳥笛と云ハ
者此鳥をさそふ料小その色を似せて製れるものよて
其誘ふ鳥小依て笛此状を各く異あり大抵を比くと云
物此状よとてさまよ吹鳴を物おゆ然まど去はと本朝
の天之鳥笛をさる類不有まじくお不也。

事始小。天磐笛。文武天皇御宇止。但以横事代主命製之奉。
 天孫瓊杵尊。出齋部私記以磐名之以祝天孫也。其形似胡笳。
 云々。と何也。此を事代主命此製らる。趣おまむ。此時々
 正は遙小後の事お正。然まど是も正しき古傳ある事を
 疑おし。お下第百三十一段さてかれ上代々り。種々の
 笛の有しを。後小今此横笛といふ物を替用ふる世と邪
 正了。上代々りの笛此製狀ハ。稍く小込ありぬむかし。其
 本朝事始よ文武天皇此御世よ替とる由云れどお前
 の御世あるべくぞ思む。○横笛和名与古布江律書
楽因云本出於羌也漢張騫使西域首傳一曲李延年造新
笛二十八曲と見え此抄の契冲書入よ古学書を引て横
笛和朝傳來推古天皇御宇味摩子來朝傳之以後漢土之
樂師來朝傳之也あり此餘筆葉竊長笛短笛尺八中管お

と和名抄にも見え。つて此時笛を吹鳴とる神を文の
 趣小て右。宇受賣命ありけ小聞ゆまど。決おく天香山命
 よぞ有んむ。故その御裔よ。笛吹氏は有れ依べし。此事お
十六段笛吹連の処第五十二段波○木く合く而を。
の下よ云ひこまを合せ考べ
 木登木袁宇智阿波勢氏と訓はし。本は云クビヤウレ
後世よ然云をど此信友云。古樂書小拍子。以木造
字音の言おまを取ら也。當時諸樂打之事中絶。神樂東遊等用之と何也。和名抄
也也。當時諸樂打之事中絶。神樂東遊等用之と何也。和名抄
予俗云百師切韻云拍也拍板樂器名也と何まど此
起原を漢土よ係とるよ非言あり既に神代より有
事ある後小志神樂小笏拍子と云古と有れ也。此その起
字也也。後小志神樂小笏拍子と云古と有れ也。此その起
お正也。後小志神樂小笏拍子と云古と有れ也。此その起
林也。後小志神樂小笏拍子と云古と有れ也。此その起

年。○備安樂之聲は阿曾毘能聲爾阿波勢也訓はし。阿波
 勢と訓あといか。○木木と云。字のま。曾那閉と訓
 むを古言ふ。阿ら。○木木と云。字のま。曾那閉と訓
 を取。○天加奈止美命と云。乙。縁也。と云。乃。は。本朝事
 始。和琴。止古登。上古天津神樂奏令加奈止美命製之。但
 横雙六張弓。以須雅乃葉。左右手奏。故又號須賀古止。有須
 賀。幾乃調。以此爲濫觴と見え。ま。神祇本源。小。神樂事
 を神室日出祕府。古語云。御琴神。金鷄命。孫長白羽命也。用
 といふ書を引て。天香弓六張。即高幡。上金鷄。居因以象也。故名之。鷄
 琴也。今世號和。といひ。亦金色鷄飛來于弓。彈其鷄。焯狀如
 流雷。由是作其尾形也。と。いひ。傳。此。富親房。卿の元。

集。も見え。と。を互。小入。混ひ。乱。と。る。ま。と。上代本記。小
 文。の。ある。を。彼。此。合。せ。見。て。引。る。あり。ま。と。上代本記。小
 也。此。時。の。神。樂。事。天。香。弓。興。竝。叩。弦。今。世。謂。和。琴。其。縁。也。と
 を。記。せる。所。見。と。る。れ。ど。を。察。合。せ。て。作。る。文。あり。小。注。を。見。て。思。ひ。辨
 べ。天。加。奈。止。美。命。事。始。よ。て。天。字。あ。き。名。義。ハ。上。小。引。る
 古。語。小。金。鷄。と。の。依。字。比。義。小。て。金。色。比。鷄。と。化。多。也。し。故
 云。かく。名。よ。負。る。れ。ら。む。云。を。見。て。け。て。本。朝。事。始。小。加。奈
 止。美。命。者。高。皇。產。靈。神。與。神。皇。產。靈。神。之。子。也。や。何。ま。ど。此
 を。疑。お。く。天。日。鷲。翔。矢。命。あり。ル。也。其。上。第。四。十。九。段。小。註。る
 如。く。天。日。鷲。命。を。弓。削。連。の。祖。ある。と。上。小。引。る。古。語。小。金
 鷄。命。孫。長。白。羽。命。と。の。を。合。せ。考。へ。て。知。ら。ぬ。れ。也。

但し此古語小孫とあれど此子と有べきあり其を第
四十九段よ委く論へるを見て知べしされと出自の傳
え違ふこかくて此命を弓を削らるる神ある故小其弓
とありし。かくて此命を弓を削らるる神ある故小其弓
を興竝べて。琴の始と爲給牙依あり。○興竝天香弓六張
而天香弓を鹿を射取る由の名小て。實を梳弓あり。委く
は下第九段天之小云はし。興竝とは其弓とも小弦を
張りその弦を上尔那して側小興竝とる由尔事其弓は
數を六張ありしとれり。此故事のほく。後まで倭琴を
六絃あり其を和名抄小日本琴万葉集云梧桐日本琴一
面云く體似箏而短少也。有六絃俗用倭琴二字夜乃止古
止とあり。新勅撰集よ六の緒のとり次と小香と小
不ふ弾く少女子此袖やふまおるまど康富記

文安六年九月十七日大炊御門殿被仰云和琴天照大神
岩戸出給候時神樂器也弓六張並彈之依之有六絃云く
ちて原をかく六絃ありしを稍後よをその數を増も減
ちも爲とゆと見えて清寧天皇卷小八絃琴見え東舞歌
小七絃の八絃此琴おど見えまよ北史倭國傳小樂有五
絃琴とも有れむさる琴も
有し小信友云繼體紀歌小隱口此泊瀬の川也あられ來
る竹の以矩美娜開余囊開もやべをを琴小造也。云云法
をを笛小造也。ふき鳴云くとある。以矩美娜開を以を
發語矩美をよも也。枝葉のおきてふさやゆふさ也
也。由あり今云久美はよも也と同言ある由也余囊
第六段久美処の下よ委く注りき余囊
開を節間の長き竹あり節此近きハ何小也るも便あり
ハまむ笏の長きを佳と以古事

記す。河辺之節竹を取て、八目の荒籠を作す。とあるも其
意あり。鈴屋大人云。余七兩節間此ことあまきも古より
通ハせて其字も「ちてかく云るは、枝れがら一本此竹を
節と書は常あり。ちてかく云るは、枝れがら一本此竹を
云るを依を。末べをた笛小造す」と。末の細きのよを切
て。穴を彫て笛小作る料とし。本儀をた琴小作す」と。其
竹の本此太死方を。琴小作依由ふて。其ハ竹此本此のよ
を切て。割て彼琴れ絃を張る料の竹と爲る由あり。哥の
あひ。琴笛の事をその作る本より。み。おれ原は弓を竝
やびて言。おけとる詞のみあり。但し此歌は竹と
て弾鳴とる證あり。此傳は思ひ合。但し此歌は竹と
云へまど。此時此弓を。天香弓とあまきを。施弓あること。上
ふ云するが如し。○長白羽命。此在上小御名の出ある處

小委く注る如く。天日鷲命此子あり。第四十九。ちて父神
を。香弓を張て琴と爲給へるを。此神の搔鳴あるへ依あり。
云。そを上より引る古語。御琴神。金鷄命。孫長白羽命也云
と。此神の弾る趣は見えど。今加奈止美命製之といへる
るを思ひ合せて曉るべし。○左右之手持茅與菅而奏
之時。菅のあとを下。第九十。小注はし。奏ハ加伎那豆流と
訓べし。ちて文意ハ聞えし依儘あり。○是倭琴之起。おは
今世小所謂倭琴也。此ハ此縁小を正て。出來ある物
ぞとの意あり。扱此小見ある如く。始は弓を竝て奏す。ゆ
を。いはゆる倭琴ハ。其を便とぬ製するふて。母とを直
小許登と云るむを異因とす種く此琴を貢奉しらバ。其

を新羅琴百濟琴あど云ふ對へて別て倭琴とは云ふあ
依べし。下第八十 六段ふ見と依天沼琴。まの上ふ引る常陸風
土記小。天之鳥琴あど有も。いりある状の琴あどいむ。知
伎りらまと許登といふ名義もいふと思ひ得。須賀スガ
加伎之縁也。須賀加伎を管搔スガカキふて管をもて搔叩カキひとし
れ也。此を後世まで此時の由縁に依れ也と聞えて。神事
の時も然らぬ時も和琴を弾くとて初發ハレふ爲扱るあ
とあり。其に貞觀儀式五節舞儀の下に。笛工調發聲。次調
御琴空フムノスガ握御琴三聲。詞云半奈次拘手三度。詞云半云々于
時舞妓四人一行徐歩云々。東西分座舞訖昇殿即奏大直

歌。本末二度。安米四度。訖退出とあり。此を信友説ふ。半奈
須歌く記ハ。歌を謠ふ以前ふ。握ウケぶとくして。字書よ
とあり云々。いぐと搔鳴カキひ由よて。歌に唱雅ツツふ合アひる調の
あきを云と聞ゆ。そを東遊風俗歌。常陸よ。比太千仁毛。田
乎古曾川久禮。阿太古呂也。加奴止也。支美加也。未乎古
江。乃乎古江。阿末與支末勢流。師說此哥乃乎之處頗異前
加く木其詞又替流。阿拍子延也。をあり此を取て。源氏物語若紫卷ふ。君
を大殿におはしり依よ。例の女君とみふも對面タイメし給ハ
び。物むぢり志ぬお不え給ひて。あ扱アまを云ウかくきて。常
陸よを田をよそ作ま。と云歌を。聲ハいとあま絶ツ死シる。云

さび給子こを云くの有さほりて物むづうして東
歌を哥ひあがら琴此調子を彈あはと
あく、妓物、きあとの由れり花鳥餘情よ和琴よ
管攪片攪とて神樂催馬樂よ用ること有と云り
や云る
 あどを合せて、を攪鳴しゑるこをを思ひ辨ふ
舊説よ管字干とるを攪集む依音よとへとる由
云るも然る説あまど本末とがへゆ須宜も本を須
賀と云へるが本意て其を云くはる音よとりて号け
とるあ依べし又或人の説よ安元二年右大臣家哥合よ
初雪を清輔朝臣おし祓うるあおのあかき白さへふ
をらひもあ牙あつもる雪かお此を川とて稻がら
を攪を去る音を去がきと云るあり此哥琴よとせと
むと云へれど全く稻がらを去がとかく由の詞あら
あるは然まを哥を聞く聞ゆまど此ふを用あし
手は、絃を爪小拘るあと此みよる此も調よは非び故ふ
牟奈天と云るれ依るし。但し此を後ふを管を去て搔鳴
ひことハ止てゑぐ糸爪をもて

鳴しゑりしありさまど其称をむ古今世よも琴を弾く
 のは、よ須賀く伎と云へるあり。今世よも琴を弾く
 を。まお空搔去る哉須賀く伎といひて。此を祝事といひ
 るあとを。此ふ依てれるはし。琵琶まよ三味線あといふ
 あり。同事。さて神樂よ和琴を彈こやは。おれ其縁ふて。大嘗
 祭式よ。琴彈二人と何依も。此琴を彈人あり。薩戒記鎮魂
 雅樂神琴師彈和琴あど。伏見院天皇夜神樂を詠ませる
 も見えたり。あを多り。伏見院天皇夜神樂を詠ませる
 大御歌よ。小夜ふけてやまと琴此音あみふる。人の心
 安神さふるはで。鴨長明が無名抄よ和琴のおこり。弓
 なるを。已たら。いとて。後人琴おあて。あきを神樂ふ用ひ
 去傳とるを。上総。固の濟物。此古苑注し文の中。お弓六張
 とうきて。御神樂料とけけ。亦號須賀古登とを。此時
 ぞぞいみじき事あり。ぞ云り。

於是天宇受賣命。以天香山出

菅をもて搔撫^{カキナ}ぬ^レ所^{トコロ}由^{ヨリ}ふ^レを^レゆ^レて。和琴を亦^タ菅琴ともいふ由^{ヨリ}あり。但^レ此^ノ号^ヲあ^ルより外^ニは^レて。本文^ニふ^レ舉^ルる傳^ノの如^クあ^まむ。琴^ハ類^ノの彈^ル物^{トシテ}神^{トシテ}を^レ加^ヘ奈^レ止^メ美^メ命^{トシテ}。長白羽^ハ命^{トシテ}ふ^レれ^ルむ^レお^はし^ル。此^ノ功^績ふ^レ依^テて。祭^ラれ^ル給^フ。御社^ニ何^レ處^ニ在^リら^ズむ^レ尋^ハぬ^レべ^シ。伊^ハ賀^ノ風^土記^ニ名^張郡^賀土^社穴^穗御^宇奉^崇也^也神^跡者^氣長^姫等^也と^り賀^羅坤土^を韓^琴あ^るべ^シ。此^ハ彼^ノ大^后の^韓を^レ征^伐さ^るへ^ル時^ニ始^メて^ハ韓^琴を^レ得^給へ^ル所^{トシテ}由^リあ^らむ^レ事^ノて^ハ祭^マる^所よ^リや^事の^於い^てふ^レ記^シ出^於

天日蔭爲髮。以天香山出天真

拵。手次繫系而。以天香山出小竹

葉結手草而。手持鐸著出而。

亦云茅。於天出石屋戸前舉庭

燎。伏汗氣而。踏登杼呂許志爲

神懸而云比登布多美用伊都

牟由那那夜許許能多理毛毛

智用呂都而相共歌舞掛出胸

乳裳緒抑垂蕃登矣故高天原

動而八百萬神共咲矣是時出

俳優者神樂出起也

日蔭也。古事記よ。日影と書き御紀よ。蘿と作て此云比
軒磯とあり拾遺よ。ハ蘿葛者比可気也。あり今
奇宮式よ。師云。齋宮式供新嘗料物よ。日蔭二荷とも。日影
從まきり。

葛二荷とも見也。さて和名抄祭祀具よ。蘿蔓比加介加都
良はと苔類よ。蘿比加介。女蘿也。松蘿一名女羅。万豆乃古

介。一云。佐流乎加世。纂疏よ。も。蘿謂垂苔也。古今集物名よ。
俗謂日蔭葛とあり。さがびぢけと。何依是あり。女蘿ハ。松枝よ。生て甚長く。色

青く帯此如くある物と。漢籍ともよ見えとまむ。佐賀理
苔てふ名も。松上よ。懸るをいふ也。或説よ。地よ。延び
く物ありと云を非

あり。○今云。此葛は樹上を懸ると地を延ぶ。此物奥山との二種ありて。形状を共ふ似たる物あり。此物奥山あらでを生じ。まど乾ても色青くて枯びとぞ。堀川百首
臣哥よ露かゝら祢どりゆくともあんと詠るも此由り
おそ。○今云。或説よ日蔭とを根れち蔓のこせありと云
るハ。此哥おどを思ひてよや根あした其子万葉十八新
を葉よも用ひて兔絲子と云ふものあり。
嘗會宴ふ。足日本此山下日影り豆良ける。うす小やさ履
ふ梅をさぬむむと何也。はと十四ふ夜麻可都良加氣麻
之波爾母衣可多伎可氣乎云々。おまよ加氣と詠るも。蘿
あ也。二よ山蘿影尔所見乍とあゆも山蘿を枕言として
影を蘿の意はけとるおと此十四の哥よて知
げし。今本よむ山字を玉ふ誤れり。十三よ雲聚山蔭とを
免るも。鈿ふ垂とる蘿あり。此山字も玉ふ誤ま也。此外よ
も山を玉よ誤まる例あ不多し。せ有也。げて此文本書よむ。手次繫天香

山之天之日影而爲鬢。天之眞拆而。と何れど。蘿を手次よ
と御紀も古語拾遺用と也。しこ
も皆同じことあり。此を錯亂あまむ。日蔭を鬢ふ。眞拆を
手次と替とる由也。古史徴小論まバ。此よを省きぬ。此段
見へちて近代は。白糸はとは青糸を組て。冠の左右ふ垂
ゆくを。日蔭鬢と云也。此物小代用らゆくふて。名れみ古
を遺せゆかめ。ちて此名義を師云。天皇の大殿を稱て。天
之御蔭日之御蔭と隱。坐まはと申は。おそ天を借字ふて
雨を蔽ひ隔て日の
光を蔽ひ隔ちる
如く。此鬢を頭をり垂ゆくも。本を日光
蔭といふ意あり。の了。鬢ゆきを霧隔ちる料ある故ふ。日蔭とを云あ也。其
由を下ふ云ふ。縣居大人説よ。蘿を繁木の中ふある古不
の。日も風もあたらぬ枝よ生ゆ故よ。山下

日影と云々言。○眞サキ拆サキ古語拾遺ふ。眞サキ辟サキ葛ゾラと書レ。造酒
れしむいカ。○眞サキ前サキ葛ゾラ繼體天皇紀歌。磨サキ左サキ乘サキ逗ゾラ囉ゾラとあり。此物の古
とも作レ。眞サキ前サキ葛ゾラ繼體天皇紀歌。磨サキ左サキ乘サキ逗ゾラ囉ゾラとあり。此物の古
と云。冠辭考ふ委く見えとレ。古今集神樂採物歌ふ。みや
ほふハ霰アラハル降らし外山ある。眞拆の葛色付ふレ。さレて此
天之香山之といレぬ。師説レ如く。あレ文を畧レちて外
なるのみあり。是も同く。彼山のあることあるし。外
宮儀式ふ。眞佐支乃鬘をレるレ。二處レ見え。古今集採
物歌ふ。卷向サナヒ此穴師の山サナヒ山人也。人も見るレ。小山鬘せ
よ。此を奥儀抄ふ神樂レるレ。眞前乃葛よレ頭を結サ
ふ。そレを城山鬘とレ云と註せレ。然れレ上代レは眞拆を
も鬘とせしレれ。但し此レを依レこレきハ本書レ為鬘レ天之
眞拆とあるを一向レ誤とを定レぐと死

子似レまどレ不レ此レ上レ引レ。高橋氏文の證もあレまレハ
縣居大人の説レ如くあるレ。さレ依レハ眞拆レ鬘レともあ
はレべレ。難レれレハあり。○手次タキ繫タキ而タキ手次タキは師説レ。書紀
とあり。難レれレハあり。○手次タキ繫タキ而タキ手次タキは師説レ。書紀
ふレ手レ纏レと書レ。此レ云多須タ積チとレ。纏チ字ハ多須タ伎チ子チ當
の手次も。今世レ。賤チ人チのチかチくチとチ。全チくチ同チ物チもチ。允チ恭チ紀
の盟神探湯の処チふチ。諸チ人チ各チ著チ。木綿手チ纏チ而チ赴チ金探湯チ。あ
とあり。然チるチ。纏チをチ負チ兒チ衣チと見チえチ。多須タ伎チの意チあり。字
鏡チ。纏チ負チ兒チ帶チ也。須チ支チまチと纏チ束チ小兒背帶チ須チ支チとあり。是
子依レて思レふレ。兒レをレ負レふレ。帶レをレ須レ支レと云レ。本レふレ。袖レをレか
かレくレ。帶レをレ手レをレりレ。かレくレ。物レをレ手レ須レ支レとハ云レ。あ
るレ。故レ書レ紀レ。手レ字レをレ添レてレ。多レ和名抄レ。本朝式レ云。禪
須伎レ。此字レを用レひレ。まレ扱レらレ。和名抄レ。本朝式レ云。禪
禪各レ。一條レ。禪レ多須レ岐レ禪レ知波夜レ。今按レ未詳レと見レ也。禪レ袖レを
倭字レ。万葉レふレ。此レとレ同レ。手次レのみ書レ。次レ字レをレ書レ。
るレ。古言レ。須伎レとも云レ。れレをレあレ。天武紀レ。次レ此レ。須伎レ
と見レ也。中昔レの物語レあり。

どふもひきくやあひ。さて手次繫を。多須伎爾多須伎
れどあると見也。と訓るは。上小引依高橋氏文小。麻作氣葛乎。多須岐爾多
須岐氏とあるよ依也。助也。用言あり。餘古書小見えざ
る古言此。多ふく。小残れるあり也。○小竹葉ハ。師云
佐く婆と訓也。允恭卷輕太子の御哥よ見也。万葉十四
小も。佐左葉とくみ。今世よも然云ゆ。今云和名抄よ。篠和
用。小竹二字謂之。佐く細く竹也。と何ゆ俗よ。在笹字を書
く米り。佐くと志乃とハ異あり。と古哥を考ふべし
さて万葉集よ。佐く那美。下の佐を濁る。誤あり。○今云
思ふべ。と云ふ。神樂聲浪と書る。畧て神樂浪とも。樂浪
馬。圍氣多郡。郷名よ。樂前と書て。は。此の故事小因て。神樂
佐く乃久万とく免るも有り。

ふち小竹葉を用ひ。其を打振音也。佐阿佐阿と鳴ふ就て。
人等ドモの同く音を和せて。佐阿佐阿と云ける故ある也。
猿樂此謠物よ。さおくの音ぞ樂むと云も。松はと竹葉
風の颯くと云音を。是よ云うけとるあり。細くの意以
此名を。佐く少負也。此音を。出於らむ。て名おんこ
ふち非。小竹と書る小字也。神樂歌古本。殖槻總角大宮。
湊田おど此處よ。本方安以佐くく。末方安以佐くく。
を云おや。是を佐く佐くを唱。とる。まを佐阿佐
阿を如此書。何ふま。彼小竹葉の音。小和せある聲
と。出於る事。結手草而也。○の天。宇受賣命
古事記を取。師云。多具佐爾由比而。と訓べし。今云。拾遺よ。
て文字作。手草。多久佐

とあり、印本多、上も今、字あるを誤あり、今ハ古本ニ、今、字あるを誤あり、結と云、數枝を合せて、本を結束ぬる也。さて持と云、祢也。手草てふ名、小て、持とを自ら聞也。か、依處古文あり、心を著法し、採物、歌、水垣の神、御代と云、小竹、葉を、あぶさ、執て遊けらしも、手草を、多夫佐と謠○手持鐸著之、茅纏之、稍、古語拾遺、天、鈿女命、手持著鐸之、矛と見え、御紀、天、鈿女命、則手持茅纏之、稍とあるを合せて思ふ、師説、著鐸之、矛といひ、茅纏之、稍と云、依處、名、の傳、の異、依處、みりて、實は、一なり、此、鈿女命の持、る、矛あり、と云れしは、さる言ふて、矛、此、依處、は、茅をもて纏て、そ

れ、鐸を著と云しを、鐸、矛とも、茅纏之、矛とも云ひ、此を、御紀、も、茅纏之、矛といふ名をもて、語れる傳を記さむ。拾遺、は、鐸、矛といふ名、語れる傳を記せ、依處、ゆ、故、鐸、著とあるを本文と爲し、茅纏と有を、亦云と記し、但し師説、御紀ある日、矛をも、同物、解、さて、鐸は、天、抄、れ、と、誤あり、其、古史、徴、辨、麻比止都禰、命、此、作、依、あり、矛、は、手置帆、負、命、日子、狹、知、命、此、木を以て造れる、此、等、を、造れる、と、並、み、上、見、え、と、神樂、取物、も、銚、あり、歌、此、矛、は、い、依、あり、矛、を、天、坐、し、を、り、姫の宮、此、御、矛、也、哥、意、を、既、し、名抄、大、清、經、云、茅、一、名、白、羽、草、和、名、智、と、あり、今、世、も

然云也。摘免バ血此出る如。○於天之石屋戸前。是より挙
拾遺ま。此を師言此如く。此前の種く此事も皆此石屋
戸前ふて以依事あるふ。此よ始てかく云る也。紀記拾遺
始てかく云る也。もとく前此事共也。神とちの身ふ付て
也。古文の俣あ依べし。爲依態こ此庭火を舉と宇氣と也。正しく其處了設置く
物おれ也。此よ至て。其處をば云べき勢あ也。さて此よ云
るが自ら前へも後子も通つて聞ゆるは。まさ古文あ也。
後世あるむ。ま始よ。○舉庭燎。此事古事記。和名抄。庭
燎。和名邇波比。庭火也。と何也。御紀了也。火處焼と見えと
也。此を庭の處く爾火を燒る由の古言ある也。凡て岩
屋戸段

の事共也。何依ぐ中ふ拾遺ふ委く記し傳へて。神樂取物
小種くあるよく符也。師云。凡そ後世。神事ふ有こと也。
大抵。此時の神遊此事態の遺れるあま。さほくの事
ハ有らむ。庭火を燒とる由を上ふ常夜往くとある如く。
世中暗くて。庭火を燒とる由を上ふ常夜往くとある如く。
昼の如く。世中變と有状を為て大御神を欺き出し奉。
まるあり。斯て此を佳例として。神事及び事ある時ハ。
火を燒き又魂祭あと。此を用て。○伏汗氣而。是をり爲神
ふ依も皆あの時よ効へるあり。○伏汗氣而。是をり爲神
古事記字。此を宇氣布勢而と訓はし。御紀了也。覆槽置と
取ま也。書て。覆槽此云于該布西也何也。今本布西二字を脱せり。
依れり。師云。書紀の書ま置字。今ハ類聚固史ふあり。師
覆字在汗氣此形を云へる字あり。思惑ふこと勿れ。師
云。是は此物此上ふ立て舞ふ。踏て響を何らせむ爲ふ。踏と
こしと云ふ。中を空虚よ設る臺よて。形状の筭此如く
よて知へし。

亦依故。名義在空筥也。或人今東よて。物よ水を湛て
々々鼓のごと鳴。これを宇氣と云と云へり。此よ依らば
浮の意とも云べし。非此。彼を響。鳴。此よ似たる
水よ浮とる。云。非。彼を響。鳴。此よ似たる
り。同く。宇氣と云。非。彼を響。鳴。此よ似たる
る。付て。以。馬槽。覆。之。云。非。彼を響。鳴。此よ似たる
槽。小。ほ。ま。酒。槽。の。器。あり。さ。れ。ど。正。しく。填。へ。き。漢。字。の。あ
ふ。設。け。の。形。状。の。ゆ。り。て。覆。槽。の。故。云。然。云。ひ。あ。せ。る。も
き。故。の。形。状。の。ゆ。り。て。覆。槽。の。故。云。然。云。ひ。あ。せ。る。も
の。あり。今。云。あ。る。も。拾。遺。の。覆。誓。槽。と。書。て。云。予。の。説。の。誤
れ。り。記。傳。よ。就。て。見。る。べ。し。さ。て。此。物。後。世。鎮。魂。祭。儀。の。遺
れ。正。を。鎮。魂。祭。の。儀。を。用。ら。ぬ。を。日。神。の。こ。も。り。坐。る
依。る。を。招。奉。正。し。心。ぞ。予。を。以。て。遊。散。は。る。魂。を。招。き。鎮。む
べ。し。貞。觀。式。小。大。藏。録。以。安。藝。木。綿。二。枚。實。於。宮。中。進。置
伯。前。御。巫。覆。宇。氣。槽。立。其。上。以。梓。撞。槽。每。一。度。畢。伯。結。木。綿。

訖。御。巫。舞。訖。次。諸。御。巫。猿。女。舞。畢。江。次。第。小。次。御。巫。衝。宇。氣。槽。
衝。宇。氣。神。遊。儀。也。以。賢。木。衝。槽。上。也。結。系。自。一。至。十。云。四。時。祭。式。彼。祭。料。物。小。宇。氣。槽
一。隻。と。あ。也。○伊。豫。国。大。洲。人。語。り。ら。く。我。が。大。洲。辺。よ
巴。を。け。ぶ。せ。と。云。ふ。其。形。状。を。木。鉢。と。云。物。の。如。く。よ。て。い
と。大。く。徑。三。四。尺。許。あり。と。云。へ。り。あ。ま。正。しく。今。と。同。じ
意。を。○踏。登。杵。呂。許。志。師。云。登。杵。呂。許。志。を。今。動。響。あ。り。加
と。云。ほ。き。を。許。志。と。云。ふ。所。知。看。を。レ。口。レ。メ。レ。万。葉。六
所。聞。看。を。キ。コ。レ。メ。レ。と。云。と。同。く。古。言。あり。万。葉。六
小。山。も。動。響。小。ま。と。宮。も。動。く。小。十。一。了。馬。音。の。跡。杵。と。も
爲。れ。む。ま。と。龍。女。響。動。小。十。四。よ。石。も。等。杵。呂。小。お。お。る。水。
古。今。集。小。天。の。原。ふ。み。や。ぐ。ろ。か。し。鳴。神。も。云。く。源。氏。夕。白。
卷。よ。お。布。く。や。鳴。神。を。正。も。お。ど。ろ。く。志。く。ふ。み。や。ぐ。

ろか也。からうはのおやも云く。那ど有也。書紀ふを。鼓と
も見也。迹驚岡あどあ。あは汗氣を踏て。響鳴志むるを
云也。後世。神事。大鼓。をうた。此音。效びし。や有
哉。和名。於保豆。美。一。云。四。乃豆。美。云。即建鼓也。と
れ。此。餘。子。摺。鼓。鞞。鼓。鼓。腰。鼓。ま。と。あ。く。小。鼓。お。と。見。え。あ
包。さ。る。由。の。名。ある。は。然。れ。都。く。美。と。云。名。義。を。革。も。て
○爲神懸而。御紀。云。歌。年。鵝。可。梨。と。何。也。師。云。古。を。崇。神
紀。小。神明。憑。迹。日。百。襲。姫。命。曰。云。く。顯。宗。紀。小。月。神。著。人
謂。之。曰。云。く。天。武。紀。小。高。市。縣。主。許。梅。儵。然。口。閉。而。不。能。言
也。三。日。之。後。方。著。神。以。言。云。く。言。訖。則。醒。矣。お。せ。何。也。古。事
記。仲。哀。段。は。於。是。大。后。婦。神。言。皆。俗。小。所。謂。託。宣。あり。但。此
教。覺。詔。者。云。く。と。有。も。同。じ。

らは。正。ま。く。某。く。此。神。の。有。は。き。事。を。告。覺。し。給。れ。る。を。今
此。段。の。神。懸。ハ。物。は。著。て。正。心。を。失。牙。る。状。ふ。え。も。云。ぬ。綺
戲。言。を。言。て。俳優。を。れ。は。を。云。あり。正。心。よ。て。其。人。の。得
ま。言。お。ど。を。神。懸。と。云。あり。今。俗。に。著。物。次。文。を。合。せ。て。
の。お。と。る。如。く。口。ば。し。る。と。い。ふ。状。あり。次。文。を。合。せ。て。
其。意。を。曉。は。し。古。語。拾。遺。の。み。ある。ハ。神。懸。も。俳優。の。中。か
る。故。あり。御。紀。の。書。ぎ。ま。あ。り。さ。ま。と。神。明。憑。談。と。あ。る。ハ。俳優
と。別。ふ。お。と。る。書。ぎ。ま。あ。り。さ。ま。と。神。明。憑。談。と。あ。る。ハ。俳優
を。以。羅。為。手。纏。と。云。る。と。只。一。連。の。事。と。聞。え。と。れ。む。実
に。別。事。は。非。ざる。こ。を。明。け。然。ま。バ。別。事。は。如。く。あ。る。ハ
書。ぎ。ま。の。あ。し。き。あり。拾。遺。を。此。を。意。得。て。諸。註。の。説。み。あ
記。る。も。此。あり。学。者。と。く。味。ひ。見。る。に。諸。註。の。説。み。あ
此。段。の。意。よ。か。あ。る。也。口。訣。を。稱。申。也。と。云。比。纂。疏。の
日。神。は。出。坐。む。お。と。を。祈。る。言。あり。と。い。ひ。或。は。八。百。万。神
の。聖。こ。と。く。憑。る。お。せ。れ。ど。云。る。み。あ。非。説。あり。も。し

此等の説此如く、兒屋根命の祝辭、こそ申し給ふべ
らま、まゝ八百萬神を、現し其庭に集へるものを、い
う他、子憑る、只私記ふ。此神明之憑談、與他處爲少異也。諸
古との有む。神欲令日神深見奇物故、俳優万態云々。然則是假爲之言、
未必有神所託也。と云るぞ宜し。死あづ易くと軽く見
く説おは、後世漢意は、諂ふ学者の病あり。凡て此宇受
賣命の事態ハ、前後に俳優あることを、凡て思ふ。然ぞ
○比登布多美用伊都牟由那、夜許く能多理母く智豫
呂都々六言四句、此諷語あるを、後了を數名とあれし
れ。其をまぢ。比登布多美用を、人蓋令見おて、人と云。石
屋戸此前、小集へる。八百萬神、あちを申し。神を人せ云る
神の御言ふ、頃者人雖多請と、八百萬神を、詔ひ海宮の段
下、井有人影と、火遠理命のおとを申せる。まゝ豊玉姫此

哥よ、赤玉の光、ハありと、比劉播伊珮耐君、ぐとそ、蓋令
ひし、とふとく、何ゆハ、比劉おど是あり。見とは、石屋、
戸を見と、此言あり。戸を布多と云る。あ、いまだ見當ら、
ぢも、戸を塞ぐもの、おて、其ヤ、グて蓋あま、だかくも言ハ
む、うし、或説お、布多ハ、將あり、人將令見れり、と云。比考、合
し、下照比賣の歌、お、布多和多流と詠る。せ、万葉、小登和
多留と詠ると、同言あるべく、お布也。伊都牟由那、は、稜
威萌成、く、おて。大御神の招事、小感坐して、石戸を内を、ゆ
細開て、御覽れ。よ、其御光、外、ま、けし、出依を、稜威萌と、
云、子、る、あらむ。ま、と、伊都、お、出の、意、も、あ、る、べし、か、の、伊豆
比、て、聞、ち、る、を、も、成、く、せ、を、そ、れ、御、稜、威、成、れ、外、お、現、を、れ、出
思、ひ、合、れ、べし。依、を、見、て、招、事、の、謀、れ、成、く、と、悅、べ、る、言、あ、る、べし。成、を、那
と、の、み

云る例を名てふ言も業。夜許く能多理を。彌心の足たる。此省言あるよて知べし。大御神の出御は状あ依り。彌心の足と悦べるあ也。心と云るを興台産霊神の許くあど是ありまよと云へり。俗言よ心地あど云ときを心をコ、と云へり。足も多良斯と云も同言ふて。天足し固足し。まよ息長帯比賣命の。帶も同じ。母く智豫呂都は。股乳宜よて。裳緒を蕃登ふ抑垂給へま。股の顯れむあど炳く。まよ胸乳をう死出あふ牙る故ふ。股乳宜しと戲言し給へ依ある。ばし。宜を豫呂都と云る例ハ萬幡豊秋津比賣と申れ。まよと膾あらむりぞも所思也。其を股字さ牙ふりき顯し給。牙まむ。膾此現あるあど灼く。殊ふ允恭天皇。卷よ見とる。

大前小前宿禰の歌ふ。宮人の脚結は小鈴おちよきと。宮人とをむとあるを。正し此此。宇受賣命の故事をを免也。足を豫く呂くと踏あどし給へるあや。とけ牙思ひ合さ依まむあ也。但し膾を和名抄よ余保呂をあまど本を決氷字コホリと云るれど是あり。けて膾を用呂と云は。用呂布所あるを也出とる名あ依べし。甲を用呂比やいれ。小鈴といひ万葉よ取をろふ天香山とも詠り。哥よ足結のるを。はと宜の用品。歡の用品あども足ぬあやあ死を也。云て。同言れ活用なるあ依べし。走使して膾を勞くより。

云るあらむ又俗言よヨロケルヨロツクヨロメクおど
いふも腫をり出ると言ふてヨロケを腫壞れ依べし
ちて六れ歌後ふ數名とあれる由を此を諷ひて舞給へ
るふ依て大御神は御心和みて石屋戸残出御せまむ稱
美べき言れ極ふ依故ふ天宮よて常ふ誦へ美とてしぐ
言ふまて終小數名とち牙爲とて所思とて其を比登
布多美用と一二三四あてあを數よ云ときハ都をつけ
去あハち箇字の義れり此を終ある百智千智と云を百都
添とるあるべし中よ百と千とを百智千智と云を百都
千都と云三十三の故ふ智も是ふ同じ伊都牟由那くハ
むまると二十三十四の智も是ふ同じ伊都牟由那くハ
五六七あて五を五十五百あど云ときを伊とのみ云を
いまど思ひ得る六字ムと云を古言の残れるり夜許く
巴今も六日をムユカセ云ハ古言の残れるり夜許く

能多理と八九十あて。年中行事抄ハをヤヨと訓る
加とるあらむまと十を景行天皇卷御火燒之老人を
哥よ登衰と見え今も然言ふこといぶし其在タリを
約免てをチあるをトせ云むあや同行の語も外を
も轉れる例あれむ然も有べき事あまども韻をうあら
更於あらでハ得有まじき物あるよ衰を何るは心得難
きを猶とく思へむ淤と遠を混れとる例いおしへよも
彼此あれむ此も古く混ひおるあらむと秘抄の訓ふ
タリヤと有るを鎮魂祭よをり十はて云ふ故と十
を終あまむ添とる辞あ依べし前よを足弥の義うとも
思子りしうど然を有まじくあそけて二十箇あるを其ト
云を二十箇うフタはハせ約まてハト箇あるを其ト
此夕と轉れ依あ依しまと三十とてハト箇あるを其ト
ツト云こせをト横母く智豫呂都を百千万あて。百を
子轉まるあるはし。母く智豫呂都を百千万あて。百を
八百せ云ときのみホと云ふを上代を言の言あらひあ
るべしまぜ此を母く此約まり母あるがホ子轉れるよ
て守をマホリとも云例あらむり又後ふ訛りてマムリ
と云をまとマブリとも云も母と富牟と布子通ふ例とひ

皇國の數名あれりて盡とす。外國も此數の餘よし。いと事痛し。其を西戎國に云ひ億を十合せると云へども億を十万といひ非を百万といひて更よ支ふし。彼國も此等此數名多設けとまぎ其國籍も多し。億を十万といひ非を百万と云てあるをや。惣て物の數ハ限りなき物あれば其名を悉く設けむとせむ。何ぞと設けとめとも足まじき。神の定免坐る數名は數少くていふ布の數よても數へ尽さる。いとむいとも妙ある。いとぬゆのし。ちて後ふ。櫛王饒速日命。天降坐ひ時。天津神十種の神寶を授ひて。若痛所あらば。茲十種を合せて。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と云ひて布瑠倍由良くと布瑠倍かく爲多らむるを。死人も生返らむと。教導し給へるを。鎮魂祭。此縁あるを。彼御祭ふ。宇受賣命。此裔とる。御巫猿女君

等。そ此事成掌正て。御巫宇氣槽の上ふ立て。梓もて其宇氣を撞く數字十種。寶此數ふ合せて。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と云ひて。其を古語拾遺らうふ唱ふる事。此の謂ふ因ことあす。其を古語拾遺よ。鎮魂之儀者。天鈿女命之遺跡。と有を以て知はし。天津神の御言よ。此を誦とらむるハ。死人も生返らむと。詔給牙流を畏み尊みて。等閑よ。あ思ひ奉す。鎮魂よ。此段のた。日神此あもり坐るを招まかりし心む。牙成以て遊散。巫の龜を招き。あおむる意あり。其を神祇令義解ふ。鎮魂言。招離遊之。運魂。鎮身。躰之中府。故曰鎮魂。とあるを見て。知依べし。あ布神武天皇卷元年。鎮魂祭の処よ。委く注せ。考ふ。ほし。○相與歌舞。記紀ともふ。六れ語あき。ハい。か。あ。相與歌。を。宇受賣命。と八百万之神。あちとれ。命。宇受賣。命。の。謠。

ふも統て八百万之神の舞を宇受賣命のみ係れり。と
諸色小哥へる由あり。舞を宇受賣命のみ係れり。と
く事状も心を著て思ひ辨ふべし。○掛出胸乳共、咲、矣、ま
でむ記を師云胸乳とを上代もあぐ知とれみ云を人身
と記也。師云胸乳とを上代もあぐ知とれみ云を人身
ふゆる乳も限らば他の物も多多く有を總て云名もて
今世も幕あど胸と云さまを混ゆる故やあらむ掛
ふむ此名遺れり。胸と云さまを混ゆる故やあらむ掛
出を加伎伊傳を訓はし。加伎は搔字を書と同くて凡て
手してゆる事も附いふ辭あり。さて古も掛を加伎とも
云べと見ゆ。故此字を借て書るれ也。明宮段も掛出其骨
万葉九も懸佩之小劔取佩こきもカキを訓べき。ちて此
亦也。今云カゲロフをカギロヒと云るも同じ。ちて此
出は伊陀志と訓べき理ありども。伊傳を自出るあり。伊
陀志ハ物を出はれ也。

伊傳と云あらす也。武烈紀歌も阿婆理豆那とて免れ。
此も求也出は。そ此外中古の雅語も皆かく云べ。さて
乳も婦人の人も見らゆるおとを恥ていゑく隠は物あ
るを。今世も婦人の乳を人に見は。故も搔出して見
ゆる事深く恥る固あり。故も搔出して見
ゆる。正心字失て物も狂ふ状をれはあり。こま即神懸
の状あり。○
裳緒は毛比毛と訓べし。書紀の訓裳を結る紐也。○抑
垂抑字記も忍やの也。今も御師云抑を軽く附云ふ辭も
紀と古語拾遺と小依れり。師云抑を軽く附云ふ辭も
は非交抑牙下はあり。此態も乳を出はると同意ばへあり。
今云御紀も拾遺も此も此も此事ともて見えぬ。あぐ
巧作能優とのみ有て。後田毘古神の段も天細女命奉勅
而往乃露其胸乳抑下裳帯於臍下而向立。咲噓と見えと
りかくて古事記もハ。まも彼所も此事あり。傳の異あり。

る中よ此ふ有、うとまさしてお布ゆさて拾遺今、本よ抑、
字を押し、あれど、今を塙本よ依まり、其を御紀とも、何へ
あり、凡て此神の人ふ恥びて、か、依態どもを爲るぞ、宇
受賣の名ふ負る、強悍コキも有る、沙石集と云物よ、和泉式部が貴布祢社、祈
おとちなる事を云る所ふ云、年毎け、るみお、赤幣とて
並、ぬる、免ぐ、正、ま、さ、は、く、ま、作、法、し、て、鼓、を、う、ち、前、を、加
き、上、て、免、く、正、ま、さ、は、く、ま、作、法、し、て、鼓、を、う、ち、前、を、加
よ、和、泉、式、部、面、う、ち、赤、め、て、云、く、千、早、振、神、の、見、目、も、恥、く
し、や、身、を、思、ふ、と、て、身、を、や、捨、べ、き、此、巫、
グ、せ、し、態、あ、く、の、態、此、遺、れ、る、あ、る、べ、し、
○動、而、ハ、師、云、由、
須、理、氏、と、訓、べ、き、万葉七ふ、大海之磯本由須理立波之、
と、何、る、ぞ、同、卷、ふ、大、海、之、水、底、豐、三、立、浪、之、と、あ、る、と、全、同、
意、よ、聞、也、か、く、て、此、動、字、登、余、美、と、訓、也、ま、と、物、語、書、あ、ど
ふ、世、中、ゆ、ひ、正、て、外、ぞ、く、多、く、云、也、其、を、舉、て、と、云、意、よ、聞

也、依、を、此、も、其、意、を、帶、て、聞、也、れ、む、あ、也、お、ち、く、ほ、れ、物、語
ふ、物、見、る、人、く、ふ、也、ひ、正、て、わ、ら、む、と、何、る、を、全、此、と、同
じ、ま、と、登、余、美、氏、と、訓、む、も、惡、う、ら、は、ぞ、有、也、今、を、登、余、美、を、取、れ、り、○咲、矣
師、云、此、を、宇、受、賣、命、此、俳、優、を、觀、て、を、か、し、け、ふ、笑、あ、ま、む、
和、良、布、と、訓、は、し、惠、良、具、と、訓、む、其、由、也、次、の、歡、喜、咲、樂、と、あ
る、處、ふ、斷、ま、す、也、○是、時、之、俳、優、者、神、樂、之、起、也、あ、れ、時、の、俳
優、を、神、樂、ま、と、猿、樂、の、起、あ、也、と、云、あ、と、古、書、ふ、多、く、見、え、
誰、も、く、く、知、ま、る、事、あ、ま、む、バ、今、更、い、ふ、ま、で、も、非、也、其、上、代、本、紀
神、祇、本、源、元、々、集、神、皇、正、統、記、あ、げ、よ、此、を、神、樂、の、起、と、い
ひ、栗、田、口、猿、樂、記、よ、抑、猿、樂、と、申、ひ、事、を、皆、人、狂、言、綺、語、れ
戲、と、の、思、へ、り、然、る、ふ、神、道、の、隨、一、み、て、侍、る、そ、れ、源、字
申、さ、バ、天、照、大、御、神、天、石、戸、よ、引、あ、も、ら、せ、給、ひ、し、時、八、百

万、神とち、哥をうゑひ、神樂を奏じ給ひりるを、岩戸も
ひらけ、世も明もありし、う、神を和らげ、世をさむる
事、おれ、過る事、あらじ、され、今も至るまで、神社の
まへ、人の家、おても、祝言の始、は、執、行ふ、おら、ひ、て、侍
る、お、と、云、る、共、も、然、る、言、お、り、し、猶、上、文、為、神、加、く、て、其
樂、之、長、而、を、何、る、処、に、云、る、を、合、せ、考、ふ、べ、し、
神樂の式を、い、る、と、委、曲、ふ、記、せ、る、物、を、見、出、す、内侍所御神
樂式といふ
書ある由、おれ、と、予、い、ま、ち、て、俳、優、を、和、邪、衰、伎、を、訓、は、し、
ど、其、書、を、さ、す、不、得、見、交、即、御、紀、も、古、語、拾、遺、も、お、り、訓、に、俳、優、字、を、漢、
籍、に、雜、戲、如、狝、猴、之、状、と、有、を、取、ら、れ、し、お、る、べ、し、言、義、は、
師、説、ふ、和、邪、は、童、謠、禍、諺、お、ど、の、和、邪、と、同、く、て、今、世、も、
神、ま、と、死、人、の、靈、お、ど、此、崇、る、を、物、の、和、邪、と、云、ふ、是、お、也、
其、を、常、に、お、も、崇、て、凶、き、事、に、此、み、云、
免、れ、ど、本、は、凶、も、吉、も、通、る、言、お、也、か、く、て、何、事、お、ま
ま、人、の、口、を、假、て、神、の、歌、ハ、せ、給、ふ、を、和、邪、歌、と、云、ひ、言、せ

給、ふ、を、言、和、邪、と、は、云、お、也、禍、も、神、の、為、し、給、ふ、言、れ、お、る
如、く、お、て、俳、優、も、神、懸、も、お、き、て、云、稱、お、寺、神、懸、の、態、を、爲
て、大、御、神、を、咲、お、ま、せ、奉、し、と、云、依、り、て、衰、伎、を、衰、加、斯
此、約、れ、る、お、る、は、加、斯、を、伎、と、約、ま、る、師、を、招、此、義、も、解
じ、く、お、不、也、其、を、此、に、お、て、は、招、と、お、て、通、也、れ、ど、下、お、奉、と
る、火、須、勢、理、命、の、俳、優、を、招、お、し、て、を、通、ぐ、と、お、ま、お、り、
ち、て、神、樂、は、元、を、此、に、隨、ふ、加、具、良、と、訓、は、し、此、も、古、言、と
聞、え、お、れ、お、お、り、加、茂、大、人、の、神、遊、考、も、始、り、加、具、良、と、訓
毘、と、訓、べ、き、由、を、論、ひ、加、具、良、と、言、る、こ、を、古、書、お、見、え、は、
七、百、年、お、り、前、の、書、と、見、お、る、お、見、え、お、る、こ、を、何、ら、免、
字、類、抄、と、云、物、に、ハ、神、樂、を、カ、グラ、と、お、り、言、義、を、神、惠、良
お、て、加、牟、は、加、具、と、お、也、惠、の、省、に、お、る、お、り、其、意、を、得、て、神

樂字を填アツとるれるシ。年ニ久の濁音フう於レ其具ニも
語勢あるを思ふべし。惠良は笑ふ状をいふ言あり。其ニ下ニも嚙シ樂
起也。波自米那琉ナルと訓シ。琉ニ者ノのちて内侍所の御
神樂をはじ免。神樂と云へば。もはら神の御前ニて爲る
遊態の名とあれるを想オモふ。此の謂ハ因て。神遊は古く
は猿ノがほしき態の可笑カシき事を主と爲レてレむ。後ニは
漢風カラガマ此調子シラバを用ふ依世とありて。漸ヤカクくニ古風キヤウは廢られ
て。嚴重シツヤウある態ニ此レみ。雅ヤやレる事とをオまレりル。漢籍
優字を雜戲ニ如シ。狝シ狝シ之状トあり。然ルハ其字を取レれシを
以て。猿樂と云ニ。舞ヲを更ニあり。神樂モ此ノ俳優ニより起リ
られ。可笑クりルハニ事知べし。其ニ世ニ傳ハる神樂歌

譜と云物を見るハ。大の漢風の譜シテあるを以て知らる
るレ。加茂大人云。伶人家ニて書集ニ免トる。躰源抄ト云
次。朱雀院。御時貞信公。撰政之間。被始。御神樂云。くと云リ
此ニ古ニくリ。神遊ヨうトへル。哥ハ有リ。みアらヒて。今ノ京
の始ハ人ノくリ。其ヲ後ニ。神樂譜ト云ル。其ニ宜キを撰マ
せラ。御時モ。或ハ去レ。或ハ加レ。らレ。しカらハむト言ハれシ。然
るニ。説ク。ありル。躰源抄ニ云フ。平調ハ金商アリ。西ノ方ニ音アリ。
神樂ハ本ハ平調アリ。依テ為レ。亡ニ。因テ音後。成テ。壹ニ。越テ。調ニ。云フ。又
氣比。宮ニ。神樂ヲ用テ。盤ヲ。涉テ。調ニ。云フ。又ハ。資忠云フ。上ニ。代ニ。神樂ヲ
無レ。調也。而シテ。近ニ。來ル。矣ハ。記ス。以テ。壹ニ。越テ。調ニ。為レ。我ノ世ニ。相ニ。替ル。事ニ。是
也ト。いハ。りル。さキ。子ノ記ス。とシ。異ナ。るハ。いハ。うノ。小ノ。そノ。やノ。今ノ思
ふハ。此ノ説ハ。まコトノ。然ル。るベし。レ。ちノ。きノ。神樂ヲもト。平調也。
と云フ。説ク。ひガ。あト。あハ。依レ。べシ。これハ。我ノ世ニ。云フ。と云フ。
はニ。此ノ資忠と云フ。人ノ世ニ。たハ。どノ。ふカ。くノ。替リ。ぬル。由アリ。
師云。資忠を堀川院ニ。此ノ時ノ人アリ。此事モ。体源抄ニ。見ユ。
てハ。王ガ。つマ。然レ。まハ。今ノ傳ハる神樂歌モ。古ノを多く絶テ。後

此歌の多く交れ正と所思と也。其の中ふ言句の數も調
はざ依狀ふて。自然ふ優美く。咲み何正て剛きぞ。古ふ近
うるばく所思と依。今傳たる神樂哥の中ふ古今集より
以下の集ふ何某れを免る哥と云ぐ
多るるをも。然らては此の故事と正起正て。神遊と云ひ。
思合去べし。神惠良と云ふ叶をされむあり。其を樂事の起る本意を
按ふふ。は於歌也。一於心れ種とれ正て。哀くも憂はしく
も。方ふ心の感くとゆ歌ひ出れども。咲榮え悦むとぬて。
歌ひ出るぞ本ありける。其を誰やし人も心悦バしきを
正ハ思ふえ免今様おど哥ひ出
るを見て知べし。哀く憂むしき時を免ぐふ阿波礼と打
出ら依のみみて強ても今様おど吟ひ出らとさきもの
あるを以加え。舞を舞ふ本意は。謠へども。おち心歡ば
て知べし。

えきふ得堪ざ依まふ。手を伸し膝をうちて。それ謠ふ
はよく。拍子を合せ也。も。猶足ばまふ立舞て。其歡む
え此情を述る態あれ也。究屈し此漢風の調子おどは舞
樂此本意ふ叶をばあむ。其在佶屈しき調子よ合せて舞
ひ哥をむと為てたおのばりら
み心屈みて伸やうれら免。然まむ。歌ふも舞ふ也。各々某
樂より免わざあまバあり。
某れ手伸しく可笑え此意のまふく。物依るぞ。正義ふ
は有る依。然るを漢國ふて樂を世を治免人よ道理を教
ふ依物の如く云るハ例のさかしらありらし
はと琴笛をむじ免。樂小用ふる器を鳴けおとも。此を歌
と舞とふ隸る也のあまむ。謠ふも舞ふ也隨意ある上ハ。
其歌ふ聲と。立舞ふ足搔ふ隨ひて。左も右も拍子を合れ

ばき物あり。其を此子。管を以て弓弦を叩鳴し。竹ふ孔を彫て吹鳴し。木と木を伐うち合せて。樂は聲ふ備せと。正有も。其趣ふ聞ゆ。依をや。然るを後世に云ふの本義を舞を合さむと為る故ふ。眞の宮風字失ひて其謠ひ舞ふ状多見る。人々然も思わざる。予が見聞く。おを却りて憂苦不正のごと思は。依をやく言は。其ハ律呂の旨を知らざる。あり。然と云も有べけ。まど律呂をお此お。うらふ。謠ひ舞ふ。うへ。備はる。物。子。こそあれ。本を正定。おきく。哥舞。残。そまよ。合はる。物。子。非ざる。をや。ちて猿樂は。神国史ふ。伊勢風土記申樂と書て。サル。マ。ヒを訓ふ。小同く。佐流麻比と訓べし。俗に佐流賀久といふ。叶たざ。此も古言と聞ゆ。後の物あら。東国紀行と云物。猿舞の訛れる。あ。依べし。其を古き道の記物語書ども。此をさる。ぐ。う。わ。ざ。さ。る。ぐ。う。が。ま。し。く。さ。れ。む。み。さ。れ。く。お。ぐ。

子。依。あ。ど。多。く。見。さ。る。を。猿。で。ふ。言。を。は。さ。ら。う。云。る。よ。て。咲。し。き。態。ひ。る。を。云。り。と。聞。ゆ。れ。む。さ。ま。舞。ハ。猿。舞。あ。る。こ。と。知。べ。し。さ。て。今。世。ま。あ。や。ま。と。い。ふ。言。あ。る。ハ。此。言。の。存。在。る。よ。や。○。又。さ。依。が。う。む。若。く。ハ。猿。樂。の。字。音。あ。る。う。樂。を。ガ。ウ。の。音。ふ。言。義。は。猿。女。舞。ふ。て。其。は。猿。女。君。の。祖。神。を。祭。る。と。有。り。此舞ハ依風よをかしき舞態あるをゆ云。子。云。子。る。あ。ら。む。川。士。清。も。既。く。猿。樂。を。猿。女。氏。の。傳。へ。さ。る。樂。と。云。義。あ。り。と。云。ゆ。き。さ。て。漢。籍。に。俳。優。姿。を。狢。猴。の。状。此。如。し。と。云。る。子。就。て。彼。獸。の。人。を。ま。ま。補。ひ。て。笑。し。き。事。は。る。思。ひ。合。せ。て。猿。舞。と。い。ふ。む。彼。物。の。状。狂。は。し。く。舞。ふ。故。り。云。ふ。あ。ど。思。ひ。紛。ふ。は。う。ら。交。あ。む。と。は。く。お。趣。き。の。似。と。る。も。の。を。猶。按。ず。猿。を。獲。田。毘。古。神。此。ゆ。り。此。物。故。お。猿。女。神。を。眞。似。て。を。う。し。き。態。を。依。る。あ。り。故。も。ろ。お。し。ぶ。こ。よ。も。猿。の。如。く。戯。る。と。云。ふ。こ。と。あ。り。猿。が。猿。女。神。似。と。る。あ。そ。此。舞。ハ。依。狀。此。正。しく。見。え。と。依。む。火。須。勢。理。命。此。火。遠。理。命。ふ。伏。ひ。て。汝。命。の。俳。優。者。と。あ。ら。む。と。云。て。面。と。掌。

小楮を塗^{スリ}て禪^{タサキ}拵^ケけ。手塞^タサギ。足を舉^ツげ踏^{フミ}て。弱^クれ苦^ク然^ニる
 時の状を學^ブびて。淖^{シホ}の足^ヲ小^シ著^ルるとき。足^ヲ占^ルを亦^シ。膝^ヲ小^シ
 至^ルる時^ニ足^ヲ戔^ツ舉^ゲ。股^ヲ至^ルる時^ニは走^リ廻^ル。腰^ヲ至^ル
 至^ルる時^ニは腰^ヲ押^ス。腋^ヲ至^ルる時^ニは手^ヲ戔^ツ胸^ヲ小^シおき。
 頸^ヲ小^シ至^ルる時^ニは手^ヲを舉^ゲ。掌^ヲを飄^フし。巴^ヲし。状^ヲを爲^ス。爲^ス
 ぞ初^メお巴^ル。依^ル。猿^ノ樂^ノの伎^ヲを秦^ノ川^ノ勝^ヲお始^メまると云^フ。説^クも聞^ク
 帝^ノ天平^ノ宝^ノ字^ノ七^ノ年^ノ正^ノ月^ノの処^ヲお作^ル。唐^ノ吐^ノ羅^ノ林^ノ邑^ノ東^ノ固^ノ隼^ノ人^ノ等^ノ
 樂^ヲ奏^ス。内^ノ教^ノ坊^ノ踏^ノ歌^ノと云^フ。こと何^カ。火^ノ須^ノ勢^ノ理^ノ命^ノの舞^ヲ給^ヘ
 る状^ヲを傳^ヘへると云^フ。樂^ヲも亦^シ。此^ヲを猿^ノ舞^トを言^フ。されども。
 此^ノ命^ハ隼^ノ人^ノの祖^ヲおまむお巴^ル。此^ヲを猿^ノ舞^トを言^フ。されども。
 俳優^トと云^フ。其^ノ舞^ル依^ル状^ト小^シ巴^ル。猿^ノ樂^ハ此^ノ態^ヲある。去^リ
 とは知^ラれぬ。然^レれど和^ノ邪^ノ衰^ノ伎^ヲを和^ノ邪^ノ衰^ノ加^ノ斯^ノあるべ^キ
然^レれど和^ノ邪^ノ衰^ノ伎^ヲを和^ノ邪^ノ衰^ノ加^ノ斯^ノあるべ^キ。疑^ハる。源^ノ平^ノ盛^ノ衰^ノ記^ヲ。猿^ノ樂^ハ

と申^ス。をウし。死^ノ事^ヲをいひお。人^ヲを笑^ハは。ま。中^ノ世^ノ。
 は。ウし。侍^ル。ぞ加^シ。と有^ル。字^ヲも思^フ。合^フ。べし。ま。中^ノ世^ノ。
 猿^ノ樂^トと名^ヲ小^シ負^ル。舞^ノの状^ヲを考^ル。宇^ノ治^ノ拾^ノ遺^ノ物^ノ語^ヲ。堀^ノ川^ノ。
 院^ノの御^ノ時^ニ。内^ノ侍^ノ所^ニ。此^ノ御^ノ神^ノ樂^ハ。夜^ノ職^ノ事^ノ家^ノ綱^ヲを召^ス。今^ノ宵^ノ。
 於^テら。し。う。ら。む。申^ス。樂^ヲ於^テう。奉^ル。と仰^ス。事^ヲ何^カ。承^リ。て。弟^ノ。
 行^ノ綱^ヲを招^キ。とせて。仰^ス。事^ヲ此^ノさ。む。ら。子^ノ。家^ノ綱^ヲを思^フ。や。う。何^カ。
 已^レ。庭^ノ火^ヲをろく。燒^ク。と依^ル。袴^ヲを引^上。て。細^ノ脛^ヲを。出^シ。て。
 云^フ。此^ノ態^ヲして。入^リ。む。と思^フ。をい。の。ふ。と云^フ。子^ノ。ば。行^ノ綱^ヲを
 母^ノ有^ル。亦^シ。然^レ。有^ル。れ。ど。お。布^ヲ。や。け。の。御^ノ前^ニ。て。む。む。あ。く。や
 と云^フ。れ。ど。家^ノ綱^ヲをむ。べ。あ。巴^ル。と。う。お。於^テ。く。殿^ノ上^ヲ。う。と。何^カ。事^ヲを
 や。せ。む。む。ら。む。と。待^テ。せ。給^フ。子^ノ。家^ノ綱^ヲ。出^テ。さ。せ。る。事^ヲ。れ。き。や

うふて入ル。正マ。まと濟スて。行綱召ヒといへば。ままと小寒
げぬる氣色を志て。膝を股までう死上て。細脛を出しわ
あき。寒げある聲して。と正くく。小夜のふけて。さ正さ
正小寒死。正ぬちふぬぐり残。あ正ちふ炙らむと云て。
庭火を十二三度ばう正廻正。走りて入ル。正上中下お布
のととみん正。家綱はうられとるを憎ム。ままども兄弟
此中。ぬぐふべくも非出とて。有しふうはらざ正け正と
見え。十訓抄。堀川院の御時。おとぐひよて。家綱行綱を
この兄弟。陪従ありん。正。無双の猿樂どもありと云るを。
まとあり。はと猿樂記云物。種々残うしげあ依舞
の名を舉て。都猿樂之態嗚呼之詞あど有まバ。都て猿女

かはし死態を爲て。人を笑はまを專と爲と依物。不て。
去此樂ぞ。此段の遊此狀う取ひて。古の宮風ある法く
所思と依。お此を田舎和とらひ為於る。布と夕ツチク舞
とあり。其。狀。い。は。は。ま。と。る。物。亦。て。正。猿。樂。記。不。謂。也。る。
侏。儒。舞。蝦。蟬。舍。人。蟪。蛄。舞。の。傳。え。れ。る。あ。ら。む。と。思。ひ。合。さ
れ。と。正。斯。て。其。舞。の。狀。を。舞。ふ。お。ま。て。傍。あ。る。人。ど。も。の
諸。色。よ。謠。ひ。を。や。し。て。誰。し。此。人。も。舞。の。氣。依。る。所。思。と。り
る。古。の。宮。風。此。狀。此。想。ひ。知。ら。れ。て。甚。感。と。く。所。思。と。り
き。但。し。固。く。處。を。依。て。唱。哥。の。ふ。し。を。異。あ。る。も。の。あ。正
其。は。と。自。然。の。風。俗。を。互。然。ま。ど。古。此。神。樂。不。舞。け。る
ひ。よ。み。や。び。を。を。聞。也。免。る。
舞を大うと咲し死態のみあ正れむを。漢風の樂を移し
用ふる世とあ正て。彼調不あ牙る舞遊を。神樂と稱ひ。
去死狀あるを尤。別て猿樂といひて。貶し卑むる事とは

かれゆしれ也。然まども堀川院天皇此御世何と云まで
も。猶内侍所の御神樂也。申樂を仕奉らせ給へるハ。然
以ぐ不古此宮風を存せるあり。村上天皇の大御言不諸
神を敬ひ。万民多安也。依去と。申樂も過とるは無し。と詔
牙るを。幹林葫蘆集と云物不見と云。實不宜ある大御
言不ぞ有ん。依。胡蘆集を明應年。宜竹と云る僧の
を。集とる物あり。記せる書よ。鎌倉の五山此僧等此詩文
同天皇の辨散樂御製不。宜。学。峽猿之奇態。莫泥水鳥之陸
少と詔へるも。猿樂ををうし。き態を專として。漢風の嚴
亦と調ふ。ど小を泥むまじ。如由を示し。給へる。おまむ。矩
則と。依。殊。不。猿樂を散樂とも云。こと。は。漢籍。よ。散樂。
野人為樂之善者。非。部。位。正。色。也。と。何。る。を。取。ま。る。お。れ。バ
更。か。り。但。し。猿。樂。と。云。む。散。樂。の。字。音。を。取。て。名。お。け。と。り。
と云説も聞ゆれども。そハ非言あり。江次第。標注よ。散樂。

猿樂也。と。何。け。て。古。不。猿。樂。と。云。る。也。何。狀。よ。ま。れ。可。笑。く
也。と云ゆ。戲とる態して。神をいさ。人。を。笑。を。以。る。事。を。言。云。し。不。
足利氏此御政奏されし比を。巴。猿樂能といふ。謠物のい
で。死。て。此。を。專。と。持。は。や。依。世。と。あり。し。う。不。古。此。猿。樂。此
狀。を。見。ば。き。物。也。能。舞。の。相。狂。言。也。云。物。不。を。存。ん。依。能。と
こと。西宮記。相摸の。外。よ。相。摸。了。能。優。一。番。と。見。え。と。れ
見。え。西。宮。記。よ。相。摸。の。外。よ。相。摸。了。能。優。一。番。と。見。え。と。れ
ども。今。在。能。舞。の。外。よ。相。摸。了。能。優。一。番。と。見。え。と。れ
後。不。在。猿。樂。此。み。お。ら。び。弘。く。雜。戲。此。態。を。云。云。と。聞
えて。文。安。元。年。此。田。樂。能。記。と。云。ふ。物。ハ。田。樂。を。も。能。せ
云。り。後。世。よ。能。と。い。ふ。ハ。此。語。を。取。て。名。お。け。と。り。と。見。也
さて。その。謠。ま。と。舞。の。狀。を。見。る。お。多。く。死。人。の。靈。此。出
て。世。を。恨。み。と。る。事。或。を。寂。滅。為。樂。お。ど。の。仏。語。此。忌。は。し
き。語。ど。も。よ。て。栗。田。口。猿。樂。記。入。讚。仏。乘。此。因。お。巴。と。云。る
如。く。お。ま。む。仏。を。申。子。と。い。ひ。到。僧。を。髮。長。と。い。ひ。墓。を。土。く

とやうに言直はべき沙庭に奏せよとむ更事も心え
安言霊神の幸ひを去り祈む人のもて難因むと心甚
ふさひしむらぬ故神樂歌古本に見えし神樂歌次第
と其裏書小記せし御前作法次第を合せし考る事
抄掃部寮座遠儲次内藏寮饗遠儲久龍口乃陣戸利物
音遠發氏御前尔參琉次各本末乃座尔著久次公卿
執氏各座尔著伎兩度度子琉先人乃長庭火乃前出来
氏云鳴高乃二度次云布留方乃不乃二度次云今
夜乃夜乃御神態乃人乃長左乃道支衛乃府乃將監某男
曲乃總檢校頻氏懸多乃天乃下子壽乃歳可御座詠物聞
次云主殿寮乃乃二度主殿寮唯稱須仰云御火白献

礼。又唯稱須。次云男共令立氏各乃戈可試支體申利多則自
加唯稱須。次云掃部寮々々二度寮人唯稱須。仰云膝突
給倍。又寮人唯稱須。次云御笛可仕支男召須。笛吹參候比。
膝突志氏庭火乃笛遠吹了留人長仰云本乃方尔候倍退出
氏本乃方乃座尔著久。次云筆築可仕支男召須。同久參候
比。膝突志氏庭火乃筆築吹了留仰云末乃方尔候倍退出氏
末乃方乃座尔著久。次云御琴可仕支男召須。琴彈參候比。
膝突志氏琴仕了留仰云本乃方乃座尔候倍退出氏本乃方
乃座尔著久。件三人人長乃命尔隨氏兩方乃座尔著了氏
引琴乃間尔人長仰云物聲與利合倍。笛筆築琴與里安波

世^多次云御歌可仕^支男召^須歌人參候^比膝突^志笏^遠腰
 尔^利差^乃間^尔笛筆築吹了^氏御琴尚不止獨搔^久間^尔兩手
 遠^合氏拍子止爲^氏出音^須其詞云美山仁波安良連布留
 良志止也末奈留^庭音留^乃間^尔人長仰云本^乃方^尔候
 倍立膝突^氏著座了^奴次末^乃歌^遠召^須同前^奈仰云末^乃
 方^尔候^倍次人長申云男共令立^氏各^乃戈試了^奴今波御
 神態可仕^乃狀申^利則自^良唯稱了^氏歸座^氏著了^留御琴
 尚^毛不止懸^利次本末^乃音頭^乃人各笏拍子^遠取^利御神
 事^遠始^年と^何正了次^尔取物九種櫛幣杖篠弓劍鉾杓葛
 用^但葛^不各雄拍子九雌拍子十と^何正此採物各々歌あり

て。本末の歌人は是を謠ひ琴笛此曲ふ合はを採物歌を謠
 ふと云お正櫛歌ハ本賢木葉の香を加ぐはしみと終
 來まバ八十氏人ぞ圓居せゆ^賢依^木の^こど^を既^よい
 來れぞあり八十氏人と云神小仕奉るもろく^此氏人
 を云ふ圓居とハ字の如くみて麻止を麻呂と^同言ある
 べく思えれさり然まバ此を宮人さちの其処より集
 する状を云るあり此哥は拾遺集此神樂哥も載られ
 とりさて因み按^よ纏^法一^まと^ひさ^ること^よて^同言
 の轉れるお依べく^的も^形の^圓ぎ^どり^云る^名ある^べし
 末神が苑のみむろ^此山^の賢^木葉^は神^比御^前小^茂正^何
 比ふ^乃正^此哥^六帖^子貫^之加^ぐ獲^と何^り縣^居大^人云^み
 ひろくさを謠ふもの^唱誤^正し^お依^べし^六帖^子神^行び
 のと有しを謠ふもの^唱誤^正し^お依^べし^六帖^子神^行び
 上^子又^も也^けあ^ま神^がき^やみ^むろ^の山^と何^るも^誤あ
 り神れびの御おろる飛鳥の雷岳此を^若く^ハ他

の社不て謠ふとき神が死と替りおや此はと或説神歌
哥を古今集此採物の哥も載られり。はと或説神歌
ふ。本賢木葉ふとふとふと誰世ふ。神此御室をい
はひ初れむ。を字常の本ふとを御神樂式本不ハ
と正を上よそ云こと例多く上小注る。未霜八度お
如し。あそも上よ云りき垂字の義あり。未霜八度お
れどもかまぬ賢木葉此立榮也。ほき神のき祢りも。常の
おろどかれせぬとあり。今ハ古本の一本まよ御神樂式
本よをまり。縣居大人説。霜八度を霜此いや度もおけ
ともお正神のき祢とを巫女のこともて祢ぎめと云を
祢字畧きめを祢を通はし云と聞也。さて賢木の榮ゆる
ことよとせて。巫女をいれふ。りとも賢木の榮ゆる
説信うと。し此を多。木と云ことよて。祢を添とる詞お
り。其を岩根木根まよ屋を屋根や云類ある。足引の山の賢
と詠る例を六帖一よかぐらを貫之。哥よ足引の山の賢
木のせきハある。陰ふ榮ゆる神のき祢りも。神葉此とき
をよしあれ。バれぐけくよ命ともて。神のき祢りも。此

等も同心然るを素性法師の哥。神祭を。神まおる卯月
よ咲る卯花を白くもき祢があらげとる。おと有るき
祢を。巫女の類として詠る。おまむ後の誤れり。猶あるべ
し。○或説。哥は常の本よを。前の哥よ並べて。大字小書と
まど。古本ふを裏書云。或本神哥と記して。一字さげ。幣。哥
て。小字よ書り。これ正し。下の或説。哥も此。小同じ。幣。哥
は。本。み。て。と。冠。は。己。ぐ。ふ。を。あら。げ。天。よ。ま。は。り。豊。遠。加。比。女
乃神のみて。丸。ら。神。字。常。本。よ。ハ。宮。と。あり。今。古。本。の。一
本。よ。を。れ。り。さ。て。哥。の。意。を。上。よ。引。て。注
る。末。み。て。を。ら。ふ。れ。ら。ま。し。物。を。委。は。神。此。御。手。ふ。と。ら。ま
て。お。お。さ。は。ま。し。を。あ。づ。さ。は。ま。し。を。一。本。よ。あ。づ。さ。は。る
あ。づ。き。と。有。り。今。古。本。ま。よ。一。本。よ。依。れ。り。さ。て。此。二。首
とも。拾。遺。集。の。神。樂。哥。よ。も。入。ま。り。さ。て。此。哥。の。意。も。既
よ。注。杖。歌。を。本。此。杖。を。い。お。お。の。杖。ぞ。天。よ。ま。は。り。豊。遠。加。比
女。の。神。此。お。お。を。神。字。常。本。よ。ハ。宮。と。あり。今。古。本
お。依。れ。り。さ。て。此。哥。此。意。も。上。よ。引。て

注へ末逢坂をりさ越來れむ山人の千やせおけとてき
れ依杖あす。縣居大人云山人を仙人此意あり万葉仙
得志先し山づとぞあまゝとあるも仙人と聞也此哥拾遺
集も有り云まゝとあり上句古本もハ王礼仁久礼
多留也万川惠曾古礼とあまゝと今在御まゝ或説杖歌小
神樂式本まゝと常本ふかく有る依れり
本足曳北山をけかしみゆふ附るさう木杖を杖了於
きおる。一首の意を越行く山路のさかまゝさし神字いと
り扱おき本どもよきまゝと末也。神の御山杖や山
ある残今む一本ふ依れり。御山を御室と云ふ同
人の千やせを祈りまゝるみ杖ぞ。御室のまゝ所を云ふ
るべもさて哥此意を皇神の御室よ奉る御杖とて篠歌
山人の殊ふ千歳を斎ひ祈りまゝる御杖をせあり篠歌
を本去此篠はいおま此篠ぞと祈りらぐ腰ふさがま依

鞆岡此篠。縣居大人説まゝおの篠を鞆岡の篠を
御守を依まむ常み矢をもて正鞆を弓射依るとき左手ふ
付るものおれバ常お腰よおけ居るおるべし故あし
よさがまゝると云ふあらむ古と祈りと云むさほし
れむ藤原奈良の朝よて云む此を大宮人此御門の御
階の下を守り從駕の時あど此さまありと有り契沖云
鞆岡を和名抄よ山城固乙訓郡鞆岡度毛乎賀とあり枕
草予ふをりと云ぬ山城固乙訓郡鞆岡度毛乎賀とあり枕
しきありやハ此哥よて云り鞆を弓射るときの具おれ
む舍人等が常お腰おけく故よかくおけと正と云
正さて此哥り依るとき正神樂ふ採れる篠を鞆岡のを
とりと聞也三句以下古本よと正ちわけむ袖おそや
ををりひめ此神の篠をとお正ちわけむ袖おそや
まゝと祈河此石はふむやもいざ川原をり。縣居大人説
句の言此みを篠の哥お取と正と祈川を上野固まある
川あり万葉よも見也とあり哥意を篠を分行うむ袖を
破きむびるぶどよ石をふむむるしれまど川原をり
行むとあり是ふ依まむ古利根川の辺を篠村をき由を

都云云。此はせしあるべし。さて此はと或説篠歌ふ。本
哥新勅撰集神楽哥も載られり。此はと或説篠歌ふ。本
篋の葉小雪降ちも依冬此夜小豊のあそびを於るが
此は給ふを豊のありと云り。此は豊のあそびと云
も豊のありと云り。神遊する心あり。然まど豊此遊と云
る古言を聞え。此の京あどふいひ初し畧言とお不也
さて此もきの葉と云る。一言を取れるのみあり。さ
て結句此は字常本。ハきとあり。今古本よとまり。末
みお垣の神代々ゆ篠の葉を。あぶさふとゆて遊び
凡雁し。契沖説。万葉よ。こぼれ。久しき世と
御世と。多し。詠正。あれ。も。ま。久しき。お。と。神。の。御。世
と云り。あぶさ。腕。字。を。後。撰。集。よ。遍。照。を。り。つ。ま。か
む。と。お。さ。ま。け。る。あ。ぶ。さ。と。云。り。若。く。は。書。誤。へ
と。る。と。詠。正。又。篠。を。手。草。ふ。と。る。と。云。り。若。く。は。書。誤。へ
て。手。草。の。誤。と。せ。ら。れ。師。も。あ。ら。ず。を。あ。ぶ。さ。と。謠。ひ。誤。ま

依あらむと云ま於れど。予ハ契沖説。お弓歌本。弓とい
心ひりる。さて遊む。姿あむち神楽あり。弓歌本。弓とい
牙む志。形。死。もの。を。梓。弓。ま。み。櫛。弓。志。形。あ。そ。あ。る。ら
志。加茂翁云。梓弓。櫛弓。櫛弓。その木よとて。種々の弓
也。依と云よ。て。此。あ。あ。や。種。とい。ふ。意。れ。正。と。云。れ。き。さ
て。此。哥。ふ。と。る。よ。神。ふ。奉。る。御。弓。は。か。く。種。々の。木。り。て。造
る。と。お。不。え。と。り。此。哥。新。勅。撰。集。の。採。物。り。載。ら。れ。と。る。よ
も。終。の。七。字。を。一。志。あ。も。あ。し。と。直。さ。れ。と。り。何。あ。依。意。と
難し。末。陸奥のあそち此真弓我ひうば。やうやくよ正
あそび。び。志。れ。び。ふ。安達を陸奥郡の名あり。其どり出る
くのあどく。ら真弓と。何るも此と。同じ。う。る。べ。し。同。集。よ
信濃のま弓と云る。あやも有り。さて。櫛。木。を。古。多。く。あ。ま
を。以。て。弓。を。造。れ。正。し。故。も。真。弓。の。木。と。云。正。し。古。終。り。此
木の名とはあま依れらむ。さて。弓。を。ひ。け。ば。本。末。の。我。方
子寄る物也。あま。と。正。來。と。云。る。あり。扱。や。う。や。く。を。古
本も常本も。やう。と。有。り。古。今。集。よ。も。採。物。の。哥。よ。入

て末さ牙を正おせあり。加茂大人説み、やうくは常言あり。こはや、くを正と云るを誤れるあらむ。万葉みもや、くあど詠て、然云ふぞ雅言。ま、と或説、弓歌依と阿、今を御神樂式の本よ従れり。ま、と或説、弓歌よ。本、さおをらぐもぬせ、此眞弓おく山ふ。みう正、はらしも弓、此筈見也。加茂翁説、弓矢をもて、物を得依と云古と云を、そやくよ、轉して、さお人、さおを、と云ゆ、もとせ、た、あ、持を、此、從て、云の、み、從者、あど、お、持、は、る、と云、ゆ、も、と、ハ、非、交、と、あり、こ、か、正、を、契、冲、云、常の、狩、れ、り、万、葉、よ、こ、袖、も、て、床、打、を、ら、ひ、と、詠、る、を、吾、袖、を、云、ゆ、今、世、を、み、う、正、と、云、を、上、の、み、云、て、下、お、は、り、を、は、ぬ、お、正、と、云、り、さ、て、常、本、よ、ハ、さ、お、て、ら、と、ある、を、今、を、古、本、一、本、よ、佐、川、乎、と、何、る、お、從、れ、り、さ、お、て、と、有、る、本、は、乎、を、手、と、誤、れ、る、ある、べ、し、契、冲、を、さ、つ、て、や、あ、依、本、を、採、て、さ、お、て、を、さ、つ、ち、お、巴、ち、を、を、と、云、を、音、の、通、へ、む、あり、薩、摩、國、も、幸、彦、と、ち、の、住、と、万、ふ、國、お、れ、バ、名、付、と、る、よ、て、知、べ、し、と、云、巴、

はと本とも山此ま安正小袋のむ梓弓神の袋からよ今

志おる加那。とも山も加茂翁解、み、或人説とて、四方八方、免きて聞也、れ、む、此、を、実、お、四、方、八、方、の、う、お、ま、る、言、お、る、俗、言、べ、し、榮、花、物、語、花、山、卷、よ、こ、と、し、を、世、此、中、お、も、ぐ、さ、と、云、もの、い、で、き、て、も、や、ま、の、人、上、下、や、こ、れ、お、依、よ、云、と、ある、を、一、古、本、よ、と、お、正、され、ど、此、の、を、も、山、を、諸、本、よ、れ、か、く、あり、拾、遺、集、の、神、樂、哥、よ、載、ら、れ、と、依、よ、を、ま、お、依、と、阿、ま、お、ら、み、け、る、弓、を、神、の、御、前、お、ら、ぬ、お、ぬ、て、ま、お、依、と、阿、ま、お、ら、み、け、る、弓、を、山、あり、し、う、さ、て、此、哥、よ、依、る、よ、古、を、世、中、人、誰、も、く、弓、を、宝、と、し、守、と、は、と、の、み、お、依、あり、ら、巴、ま、お、り、を、古、本、の、一、本、ま、と、御、末、梓、弓、を、神、樂、式、本、よ、ハ、ま、お、り、と、有、り、同、じ、お、と、お、巴、

依來るおぞお皇神の豊此あそびお阿ハむとぞ思ふ。梓、あ、よ、て、を、春、よ、う、け、と、依、發、辞、ある、を、此、哥、神、祇、の、哥、よ、て、梓、弓、と、云、言、さ、ま、阿、る、也、お、よ、弓、の、哥、と、を、為、お、る、お、依、可、劍、哥、は、本、白、う、祢、此、目、貫、の、太、刀、を、さ、お、は、き、て、お、ら、の、都、を、祢、る、を、ぬ、の、子、ぞ。目、貫、を、信、友、云、中、右、記、寛、治、八、年、此、下、よ、劍、の、事、を、云、る、處、よ、目、貫、之、穴、

二とあり。今云ふ目釘穴ありと云。正。祢るを足ふを齊
とく。静よ。正と依意ありと。加茂翁の言れとる。如し。さ
て常。本。小。を。祢るや。と。何るを。今。古。本。よ。従。末。石。上。古。屋
れり。ま。と。一。古。本。よ。を。祢。正。正。と。依。ウ。机。と。有。末。石。上。古。屋
を。や。古。の。太。刀。も。グ。机。く。み。の。緒。志。で。宮。路。か。と。は。む。加
翁。説。み。布。留。神。社。あ。ど。ま。在。し。人。と。き。太。刀。を。死。し。去。と。有。
ウ。ま。と。此。神。宮。よ。古。宝。劔。を。多。く。納。給。ひ。し。ウ。む。其。よ。准
へ。て。を。死。太。刀。は。く。人。有。し。ウ。万。葉。十。六。よ。虎。よ。乘。正。古。屋
を。越。て。青。淵。よ。鮫。龍。と。り。來。む。劔。刀。も。グ。この。古。屋。を。地。名
と。見。也。今。も。是。あり。石。上。を。冠。辞。ある。べ。し。然。ら。バ。古。の。古
屋。を。何。処。と。も。知。グ。と。し。万。葉。哥。此。劔。刀。も。グ。古。屋。よ。と
し。有。こ。や。見。也。る。を。此。の。哥。よ。れ。古。へ。ウ。の。地。よ。
死。太。刀。も。と。る。を。と。有。し。ウ。く。み。の。緒。を。太。刀。此。を。と。り
の。く。こ。み。て。と。依。を。云。と。あり。さ。て。ま。と。或。説。劔。歌。本。い
此。二。首。も。拾。遺。集。神。樂。哥。よ。入。れ。り。は。ひ。來。し。神。を。ま。お。正。お。明。日。と。正。を。く。み。の。緒。志。で。何
そ。べ。太。刀。を。死。何。そ。べ。を。本。ど。も。お。何。そ。び。と。ある。を。今。を
古。本。よ。依。ま。正。哥。の。意。を。神。の。祭。は。去。ぎ。お

れ。む。際。何。き。と。り。太。刀。を。き。て。何。そ。べ。と。誘。ひ。と。る。意。と。聞
也。ま。と。女。神。の。御。前。を。拜。む。よ。太。刀。を。く。ま。じ。き。故。実。の
有。よ。り。て。按。ふ。よ。大。御。神。ハ。女。神。よ。ま。せ。む。古。その。御。前
小。候。ふ。と。して。太。刀。を。ハ。き。て。何。そ。と。云。よ。其。御。祭。れ。去。ぎ。お
れ。古。よ。太。刀。を。や。と。お。き。物。よ。と。り。と。お。と。此。哥。よ
て。も。知。末。お。お。お。き。小。皇。神。と。ち。を。い。む。ひ。お。し。心。は。今。ぞ
ら。る。多。此。し。加。正。依。加。茂。翁。解。み。奥。つ。き。ハ。奥。櫛。よ。て。人。を。く
く。い。む。ひ。奉。る。御。室。を。も。云。し。あり。や。何。り。哥。の。意。を。お。き
お。き。よ。皇。神。と。ち。を。い。は。ひ。竟。お。ま。む。今。を。心。此。の。意。を。お。き
と。歡。べ。る。あり。但。し。此。哥。劔。よ。を。縁。お。し。然。る。を。梁。塵。抄。よ。
皇。神。と。ち。と。ある。よ。ち。を。太。刀。の。縁。よ。解。れ。し。を。い。か。ぐ。何
ら。鉾。歌。を。本。古。の。鉾。を。い。お。お。此。鉾。を。天。小。ま。は。豊。を。り。姫
の。宮。此。み。ほ。あ。ぞ。み。古。本。よ。諸。本。よ。ほ。あ。ふ。り。と。何。る。を。今
正。○。あ。く。よ。出。と。る。み。て。ぐ。ら。ハ。云。く。此。杖。を。云。く。此。鉾。ハ
云。く。あ。ど。の。哥。三。首。を。これ。ら。此。時。豊。宇。氣。大。神。を。祭。り。と。る

證と依べし。去き即大御神の豊宇氣大神を祭_レ給へる
大御心を心として祭あり。また大殿祭の文と見依
し。末と母山の人れまほ_レ正。お去依_レ鋒を。神れみま_レ牙_レい
はひゑてと依。加茂翁解_レ前_レの弓_レれ_レ哥_レとひとしく。其中
坐云むが如し。と言ま_レし_レを_レさ_レる_レ説_レて_レ此_レ哥_レも依_レて思ふ
よ。坐とも山を云詞_レを_レ四_レ方_レ八_レ方_レと云言_レの訛_レりと知られ
と正_レさて諸本よ。ま_レ布_レ正_レを_レま_レも_レり_レい_レを_レひ_レとて_レ杓_レ歌_レハ。
依をい_レを_レひ_レぬ_レ哉_レとある_レを_レ今_レを_レ古_レ本_レよ_レ依_レま_レり_レ杓_レ歌_レハ。
本大原やせが_レの_レ水_レを_レひ_レさ_レお_レも_レて_レ鳥_レハ_レ鳴_レと_レも_レ遊_レび_レて
ぬまむ。梁塵抄小せが_レの_レ水_レを_レ清_レ和_レ井_レと_レう_レけ_レ山_レ城_レ固_レ大_レ原_レ
清和院を枕_レ子_レふ_レせ_レが_レの_レ名_レあり_レを_レ解_レま_レし_レを_レ加_レ茂_レ翁_レ解_レよ。
云は_レい_レろ_レよ_レぞ_レや_レせ_レが_レの_レ堰_レ之_レ井_レお_レ正_レ大_レ原_レや_レ堰_レの_レ清_レ水_レ
を_レと_レ伊_レ勢_レ物_レ語_レ古_レ本_レよ_レも_レる_レこ_レま_レれ_レ右_レ哥_レ六_レ帖_レハ_レ手
ふく_レこ_レて_レと_レる_レを_レ杓_レの_レ哥_レと_レせ_レむ_レと_レて_レ杓_レも_レて_レ替_レと_レる
お_レ正_レと_レあり_レ六_レ帖_レよ_レ依_レると_レき_レを_レせ_レが_レの_レ水_レを_レ手_レよ_レく_レみ
ぬ_レ鳥_レを_レ鳴_レと_レも_レ涼_レみ_レ遊_レむ_レと_レ云_レる_レお_レ依_レを_レ此_レを_レ其_レを_レ直

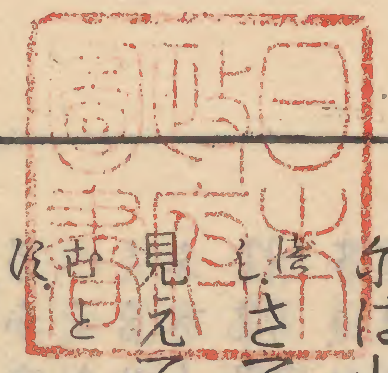
して杓の採物哥とぬぬるふれむ。涼の意をかくぬ。鳥
を鳴とも遊むむを云るよ。大原やせが_レの_レ水_レを_レと_レ云
まで。序を見てあるべきよ。さて古本よ。大原やせが_レ
ぬぬぬとづひざこして。鳥をかくとも。安曾不世遠久女
とぬぬとあるを。今を御神樂式。本よ。從れ。末。正。門の板
井の志み。抄里遠。人しく。ま。水さ。び。ふ。り。板。井。を。今。井。似。
開。説。お。板。を。並。て。井。と。せ。る。あり。と。あり。さて。常。本。よ。水。
草。ぬ。み。り。と。ある。を。今。を。古。本。よ。依。ま。ゆ。水。佐。比。と。ハ。水。
滋。の。浮。く。こ。を。あり。と。加。茂。翁。の。言。れ。と。る。が。如。し。古。今。集。
採。物。哥。を。水。草。お。ひ。ふ。り。ゆ。と。ある。是。も。惡。う。ら。び。ま。と。
六。帖。よ。初。句。を。我。や。ど。の。と。を。有。て。古。本。よ。依。る。ふ。終。の。七。
有。て。家。持。卿。れ。哥。を。せ。り。字。は。こ。れ。折。り。牙。して。万。止。爲。世。利。計。留。万。止。爲。世。利。計。留。
美川佐比仁計利。美川佐比仁。利。と。謠。ふ。お。と。お。正。謠。竟。
て。於。介。阿。知。女。於。介。く。と。囉。ひ。お。ど。く。さ。ぐ。さて。此。右。
さ。作。法。の。ある。を。其。を。その。書。お。就。て。見。べ。し。さ。て。此。右。

此歌ども残擧て、少⁴く其意をも解⁷れる也。此段⁵も備⁶と⁸正⁹
し物¹⁰を思ひ合せて、古意を辨ふべき歌も多¹¹うれむあり。
その中¹²より、杖杓¹³を、此段¹⁴も見えざること、
ちてかく杓歌¹⁵
までを謠ひ竟て、次¹⁶り片折と云を謠ふこと也。片折¹⁷て
加茂翁¹⁸解¹⁹よ、求子²⁰哥の末²¹よ、加太²²於呂志²³加太²⁴於呂志²⁵と何
り、古事記²⁶り、片下²⁷と云こともあり、さまむ此の折²⁸も、おろ
し、の意²⁹よて、下の借字³⁰を思へど、かお違³¹るむ、板井³²やの
言³³此³⁴み³⁵を、重³⁶祢³⁷うとふを云³⁸を、言³⁹れしハ、梁塵抄⁴⁰ふ、片折⁴¹と
云⁴²む、哥⁴³曲⁴⁴此⁴⁵節⁴⁶此⁴⁷名⁴⁸あり、杓⁴⁹の哥⁵⁰よとりて、せ⁵¹が⁵²わ⁵³や⁵⁴せ⁵⁵が
わ⁵⁶板⁵⁷井⁵⁸やいとわと、二⁵⁹句⁶⁰を重⁶¹祢⁶²て謠⁶³ふを云⁶⁴り、とあるよ
も符⁶⁵
へり、其歌⁶⁶を、本⁶⁷方⁶⁸よては、大原⁶⁹や、せ⁷⁰が⁷¹わ⁷²や、せ⁷³が⁷⁴わ⁷⁵は、水⁷⁶
杓⁷⁷もて、鳥⁷⁸は鳴⁷⁹くとも、遊⁸⁰びてくまむの歌⁸¹を謠⁸²ひ、末⁸³方⁸⁴よ
て、我門⁸⁵乃⁸⁶板⁸⁷井⁸⁸や、板⁸⁹井⁹⁰の清⁹¹水⁹²さ⁹³や、⁹⁴布⁹⁵み、人⁹⁶しくま⁹⁷祢⁹⁸む

水¹さ²び³ふ⁴る⁵正⁶此⁷歌⁸を謠⁹ひ、次¹⁰り諸¹¹擧¹²と云¹³を謠¹⁴ふ、其¹⁵歌¹⁶を、
本¹⁷方¹⁸よて、せ¹⁹が²⁰わ²¹や、せ²²が²³わ²⁴の²⁵水²⁶杓²⁷もて、鳥²⁸は鳴²⁹
と、安³⁰あそ³¹びてく³²はむと謠³³ひ、末³⁴方³⁵よて、板³⁶井³⁷やいとわ板³⁸
井³⁹の清⁴⁰水⁴¹里⁴²と、布⁴³み、人⁴⁴しくま⁴⁵祢⁴⁶む、水⁴⁷さ⁴⁸び⁴⁹ふ⁵⁰る⁵¹正⁵²の⁵³歌⁵⁴を
謠⁵⁵ふこと也。諸⁵⁶擧⁵⁷てふこと、梁塵抄⁵⁸ふ、此⁵⁹も哥⁶⁰此⁶¹節⁶²を
を云⁶³り、ぬ⁶⁴やへ⁶⁵バ、陽⁶⁶関⁶⁷三⁶⁸疊⁶⁹の⁷⁰曲⁷¹と云⁷²が如⁷³く、王⁷⁴維⁷⁵が詩⁷⁶を、
行⁷⁷人⁷⁸を⁷⁹送⁸⁰る⁸¹と⁸²き、詩⁸³此⁸⁴句⁸⁵を、三⁸⁶度⁸⁷か⁸⁸き⁸⁹祢⁹⁰て、謠⁹¹ふこと、の⁹²有⁹³
小⁹⁴准⁹⁵ふ、次⁹⁶り韓⁹⁷神⁹⁸の⁹⁹歌¹⁰⁰と云¹⁰¹を謠¹⁰²ふ、其¹⁰³を本¹⁰⁴方¹⁰⁵よて、三¹⁰⁶嶋¹⁰⁷也
ふ肩¹⁰⁸よ取¹⁰⁹挂¹¹⁰け、己¹¹¹れ韓¹¹²神¹¹³此¹¹⁴か¹¹⁵ら¹¹⁶を¹¹⁷曳¹¹⁸せ¹¹⁹む¹²⁰や¹²¹う¹²²ら¹²³を¹²⁴死¹²⁵。三¹²⁶
也¹²⁷多¹²⁸の¹²⁹こ¹³⁰と、梁¹³¹塵¹³²抄¹³³ふ、伊¹³⁴豆¹³⁵、三¹³⁶島¹³⁷と云¹³⁸所¹³⁹を¹⁴⁰り¹⁴¹出¹⁴²る¹⁴³木¹⁴⁴
棉¹⁴⁵あり、を¹⁴⁶見¹⁴⁷え、加¹⁴⁸茂¹⁴⁹翁¹⁵⁰も、此¹⁵¹説¹⁵²よ¹⁵³を¹⁵⁴ら¹⁵⁵れ¹⁵⁶と¹⁵⁷ま¹⁵⁸ど、木¹⁵⁹綿¹⁶⁰を¹⁶¹安¹⁶²
藝¹⁶³、固¹⁶⁴の¹⁶⁵を¹⁶⁶用¹⁶⁷ふ¹⁶⁸由¹⁶⁹、式¹⁷⁰よ¹⁷¹も¹⁷²令¹⁷³ふ¹⁷⁴も¹⁷⁵記¹⁷⁶さ¹⁷⁷れ¹⁷⁸と¹⁷⁹る¹⁸⁰を¹⁸¹何¹⁸²は¹⁸³祢¹⁸⁴
む、亦¹⁸⁵不¹⁸⁶疑¹⁸⁷は¹⁸⁸心¹⁸⁹、肩¹⁹⁰よ¹⁹¹と¹⁹²り¹⁹³挂¹⁹⁴む、祝¹⁹⁵詞¹⁹⁶、文¹⁹⁷よ、弱¹⁹⁸肩¹⁹⁹、尔²⁰⁰太²⁰¹禰²⁰²取²⁰³懸

氏と見え允恭天皇紀よ木棉禪の事見え依あども依
るみ手次みかくるをしあり加茂翁解み木綿を頭とり
肩まで垂依く故み肩み取分けと云るあり頭みかくる
事万葉見韓招と云知しうと然を有ま心くおそら
まむ枯萩見韓招と空招の意をう萩と云くや清暑堂御
神楽の試楽執柄家よて行た依と見え源氏物語若菜下
枝を待こと何り是祕藏事おむ見え上達部ハ肩ぬぎ
おまをめぐりハおさる若やうれも上達部ハ肩ぬぎ
て云く見るハおさる若やうれも上達部ハ肩ぬぎ
依萩を高くやみさる若やうれも上達部ハ肩ぬぎ
せて思ふいとおもさる若やうれも上達部ハ肩ぬぎ
こと論ひおさる若やうれも上達部ハ肩ぬぎ
る意大御神の石屋戸ふさし隠り坐るを招奉しを本
みて空招ハせまじ招出し奉らむとの意よて空招と韓
招語の同じき故よ韓神の事素盞翁等予也と何ハ正
とを御神式お韓神之事素盞翁等予也と何ハ正
傳よて五猛神の如く韓招せむやと云て空招よ云う
神ある故よ韓神此如く韓招せむやと云て空招よ云う

けさるものあ依べし然れど韓神事ふ詞を此うやう
依事よむ非ざるをぬ其詞を取て哥の名とさ子あ
るあらむ御神楽式お加良於幾座置也とあるを誤ある
べしハ不韓神の事ハ第六十七段五十猛神の処お云ふ
を合せ考を謠ひ末方おてハひらでを手おと正持て已
ふべし
れ韓神のからを死せむやのぬ字死加茂翁解みハひら
あり柏葉を集て竹串を器形お作りて神の御食物をも
るれり大嘗祭式お葉盤比良氏似笠形とある是ありと
あり八平手の意と依るを思ふべしを謠ふことれ正さ
手おと正持てや何るを思ふべしを謠ふことれ正さ
上件取物歌了て次人長さし擬ひ各くお酒を給ひ其
事了て倭舞仕奉依人を召て舞し死是を前張仕奉
るおとれり前張よ大前帳小前帳と云何正梁塵祕抄お
難波泻前張階香取并奈野これあり小前張よ哥九首あ
り薦枕閑野碓等篠波殖槻総角大宮湊田菴おれありさ



いむ正と云名の義を初萩ありさいを前あり初と云意
 ありはりを萩あり万葉は正原と云へるも萩原あり
 さて前張よむさいむ正小衣を原らむ雨ふれどうつろ
 ひがとし多りくそめてむと云一曲の名を凡てよ通し
 て名付さるふ毒大前帳七首の中此前張を本曲よてあ
 るを其調子りて十六首おぐらうあふよ取りて又律呂
 おどのちがひ免あるよとりて大前張小前張とむいひ
 替とるよやお不郢曲の人小問べしと是も梁塵秘抄の
 説おあ不次く謠ふ歌お不く種く此式あ依事あるを此
 尔は少り其次第を記はのみお正読み其人お就て問ふ
 して古本此目錄此處おキリクスをゆ以下を雑歌と云ふ由
 見えて終お神舉と云歌此名ありおハ神楽哥此注解よ云
 後書と

○門人岩崎長世間秀矩馬嶋穀生ら云ふ此古史傳の

十卷のま正一卷おあふ依ま記を板子彫らばとイタ勞ら
 ぶ秀矩穀生らもねれし美濃国惠那郡中津川の里人
 高木定章勝野正方二人よあそ

高木宝章翻撰五言三人志きと
ふん表歌肆主のまはり美敷国惠雅中牟川の里入
十卷の書に... 古本此目錄此處小藝より以下在雜歌と云ふ由
... 高木宝章翻撰五言三人志きと... 美敷国惠雅中牟川の里入
... 十卷の書に... 古本此目錄此處小藝より以下在雜歌と云ふ由

